駒方古屋遺跡

第2次·第3次発掘調查報告書



別府大学付属博物館

1 9 8 7



目 次

		頁
はじめ	ok	1
第I章	遺跡の環境	$\overline{2}$
第II章	調査区の設定	4
第Ⅲ章	基本層序	6
第IV章	石器群の遺存状況	9
第1節		9
第2節	う 文化層の把握	9
第3節	う ブロック (ユニット) の設定	12
第4節	う 個体別資料の分析	15
第V章	駒方古屋遺跡第2地点の石器群	21
第1節		23
1.		23
2.		32
第2節	5 駒方古屋第1文化層	50
1.		50
第3節		
付 1	. 駒方古屋遺跡第2地点の剝片について	53
	. 駒方古屋遺跡石器類観察上の規定	
	. 石器類個別観察表	
おわり	k	66
	挿図目次	
		頁
第1図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡	2
第2図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 駒方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡	2
第2図 第3図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 駒方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点	2 3 4
第2図 第3図 第4図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 駒方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形	2 3 4 4
第2図 第3図 第4図 第5図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 駒方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形 第2地点の調査区と土層観察地点	2 3 4 4 5
第2図第3図第4図第5図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 駒方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形 第2地点の調査区と土層観察地点 基本土層柱状模式図	2 3 4 4 5 7
第2図第3図第4図第5図第6図第7図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 駒方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形 第2地点の調査区と土層観察地点 基本土層柱状模式図 駒方古屋遺跡第2地点の土層図	2 3 4 5 7 込
第2図図図図図図の 第4回図 第5回図図 第7図図 第7図図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 駒方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形 第 2 地点の調査区と土層観察地点 基本土層柱状模式図 駒方古屋遺跡第 2 地点の土層図 斯方古屋遺跡第 2 地点と周辺の土層図 折	2 3 4 4 5 7 込込
第 2 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 駒方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形 第2地点の調査区と土層観察地点 基本土層柱状模式図 駒方古屋遺跡第2地点の土層図 折 駒方古屋遺跡第2地点と周辺の土層図 折	2 3 4 4 5 7 込込10
第 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 駒方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形 第 2 地点の調査区と土層観察地点 基本土層柱状模式図 駒方古屋遺跡第 2 地点の土層図 斯方古屋遺跡第 2 地点と周辺の土層図 新知垂直グラフ 石質別垂直グラフ	2 3 4 4 5 7 込込10 11
第 2 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 駒方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形 第 2 地点の調査区と土層観察地点 基本土層柱状模式図 駒方古屋遺跡第 2 地点の土層図 駒方古屋遺跡第 2 地点と周辺の土層図 器種別垂直グラフ 石質別の出土層位グラフ	2 3 4 4 5 7 込込 10 11 11
第 2 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 駒方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形 第2地点の調査区と土層観察地点 基本土層柱状模式図 駒方古屋遺跡第2地点の土層図 駒方古屋遺跡第2地点と周辺の土層図 新駒方古屋遺跡第2地点と周辺の土層図 据種別垂直グラフ 石質別垂直グラフ 石質別の出土層位グラフ 個体別資料の出土層位グラフ	2 3 4 5 7 込 10 11 11 19
第 2 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 駒方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形 第2地点の調査区と土層観察地点 基本土層柱状模式図 駒方古屋遺跡第2地点の土層図 駒方古屋遺跡第2地点と周辺の土層図 新題別垂直グラフ 石質別垂直グラフ 石質別の出土層位グラフ 個体別資料の出土層位グラフ 駒方古屋遺跡第2地点のブロック群の位置	2 3 4 4 5 7 込込10 11 11 19 22
第 3 2 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 勝方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形 第 2 地点の調査区と土層観察地点 基本土層柱状模式図 駒方古屋遺跡第 2 地点の土層図 斯駒方古屋遺跡第 2 地点と周辺の土層図 折駒方古屋遺跡第 2 地点と周辺の土層図 折 器種別垂直グラフ 石質別垂直グラフ 石質別の出土層位グラフ 個体別資料の出土層位グラフ 胸方古屋遺跡第 2 地点のブロック群の位置 ナイフ形石器・スクレイパー (第1ブロック)	2 3 4 4 5 7 込込 10 11 11 19 22 23
第3年4年3日 第3年3日 112日 112日 113日 113日 114日 115日 115日 115日 115日 115日 115日 115	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 勝方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形 第 2 地点の調査区と土層観察地点 基本土層柱状模式図 駒方古屋遺跡第 2 地点の土層図 折駒方古屋遺跡第 2 地点と周辺の土層図 折駅種別垂直グラフ 石質別垂直グラフ 石質別の出土層位グラフ 個体別資料の出土層位グラフ 個体別資料の出土層位グラフ 駒方古屋遺跡第 2 地点のブロック群の位置 ナイフ形石器・スクレイパー(第1ブロック) 二次加工剝片・使用痕剝片(第1ブロック)	2 3 4 5 7 込 10 11 11 19 22 23 25
第 3 2 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 勝方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形 第 2 地点の調査区と土層観察地点 基本土層柱状模式図 駒方古屋遺跡第 2 地点の土層図 折駒方古屋遺跡第 2 地点と周辺の土層図 折駒方古屋遺跡第 2 地点と周辺の土層図 折野種別垂直グラフ 石質別の出土層位グラフ 石質別の出土層位グラフ 個体別資料の出土層位グラフ 脚方古屋遺跡第 2 地点のブロック群の位置 ナイフ形石器・スクレイパー(第1ブロック) 二次加工剝片・使用痕剝片(第1ブロック)	2 3 4 4 5 7 込 3 10 11 11 19 22 23 25 26
第3 第	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 勝方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡 遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形 第 2 地点の調査区と土層観察地点 基本土層柱状模式図 駒方古屋遺跡第 2 地点の土層図 折駒方古屋遺跡第 2 地点と周辺の土層図 折駒方古屋遺跡第 2 地点と周辺の土層図 折器種別垂直グラフ 石質別の出土層位グラフ 個体別資料の出土層位グラフ 個体別資料の出土層位グラフ 駒方古屋遺跡第 2 地点のブロック群の位置 ナイフ形石器・スクレイパー(第1ブロック) 二次加工剝片・使用痕剝片(第1ブロック) 剥片(第1ブロック)	2 3 4 4 5 7 込込 10 11 11 19 22 23 25 27
第 3 2 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡 駒方古屋遺跡周辺の地形と調査地点 土地改良事業以前の遺跡周辺の地形 第2地点の調査区と土層観察地点 基本土層柱状模式図 駒方古屋遺跡第2地点の土層図 駒方古屋遺跡第2地点の土層図 新知垂直グラフ 石質別垂直グラフ 石質別の出土層位グラフ 個体別資料の出土層位グラフ 駒方古屋遺跡第2地点のブロック群の位置 ナイフ形石器・スクレイパー(第1ブロック) 二次加工剝片・使用痕剝片(第1ブロック) 調整剝片(第1ブロック) 剝片(第1ブロック) 接合資料(第1ブロック)	2 3 4 4 5 7 込 10 11 11 19 22 23 25 27 29
第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡	2 3 4 5 7 込 10 11 11 19 22 23 25 26 27 29 30
第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡	2 3 4 4 5 7 込込 10 11 11 19 22 23 25 27 29 30 31
第第第第第第第第第第第第第第第第第第 1112 123 133 134 135 135 135 135 135 135 135 135 135 135	大野川流域の地形と駒方古屋遺跡	2 3 4 4 5 7 込 10 11 11 19 22 23 25 26 27 29 31 33

第23図	二次加工剝片・使用痕剝片(第2ブロック)	35
第24図	調整剝片 (第2ブロック)	37
第25図	調整剝片 (第2ブロック)	38
第26図	剝片 (第2ブロック)	40
第27図	剝片 (第2ブロック)	41
第28図	敲石(第2ブロック)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	42
第29図	接合資料 (第2ブロック)	44
第30図	接合資料 (第2ブロック)	45
第31図	接合資料 (第2ブロック)	46
第32図	接合資料 (第2ブロック)	47
第33図	接合資料 (第2ブロック)	48
第34図	接合資料 (第2ブロック)	心
第35図	接合資料 (第2ブロック) 掛	秘
第36図	剝片・ブランク (第3ブロック)	51
第37図	スクレイパー・調整剝片 (表採)	
第38図	打面の長幅比グラフ	
第39図	ブロック別の打面形状グラフ	
第40図	剝片の長幅比グラフ	
第41図	遺物の計測・観察基準	54
第1表	駒方古屋遺跡土層対比表	8
第2表	and the same of th	-
第3表	各グリット・各層別の石器組成表	
第4表		18
第5表	各ブロックにおける個体別資料 ······	18
第6表	ブロック別石器組成表	
第7表	各層出土の石器組成表	21
	図版目次	
図版 I	駒方古屋遺跡近景と大野原台地遠景	
図版II	駒方古屋遺跡第2地点の調査風景	
図版III	駒方古屋遣跡の土層断面	
図版IV	駒方古屋遺跡の石器類出土状況	
図版 V	第1ブロックの石器群(ナイフ形石器・他)	
図版VI	第2ブロックの石器群 (ナイフ形石器・他)	
図版VII	第2ブロックの石器群 (剝片)	
図版Ⅷ	第2ブロックの石器群(接合資料)	
図版IX	第2ブロックの石器群(接合資料)	
図版X	第2ブロックの石器群(石核)	
図版XI	第3ブロックの石器群・表面採集の石器	
付図 I	石質別平面•垂直分布図	
付図II	岩種別平面・垂直分布図 器種別平面・垂直分布図	
付図Ⅲ	層別平面分布図	
付図IV	層別平面ガル図 器種別平面・垂直分布図 (接合のみ)	
付図V	個体別平面分布図(接合のみ)	
	個体別平面分布図	
۲ ۷ انتور ر	16H 74 F P974 14K9	

はじめに

別府大学付属博物館では、昭和54年から「大野川流域における先史時代の調査研究」のテーマに基づいて、当流域の調査を組織的かつ継続的に行うべく努力している。

これまでに、大野町今峠遺跡・同町製糸工場前遺跡・同町片島道下遺跡・直入郡荻町上岩戸遺跡などの試掘調査、三重町上下田遺跡の2回にわたる発掘調査、この外、大野町・三重町・清川村などの大野川流域を中心とする分布調査を実施してきた。

駒方古屋遺跡の発掘調査もこの一環として実施したものである。当遺跡の発掘調査は、大野川流域における旧石器文化、特に姶良丹沢火山灰(通称 AT) 堆積以前の石器群についての究明に 焦点をあてて行ったものである。

大野川流域には約100箇所の旧石器(先土器)時代の遺跡が知られており、大分県下の同時代の遺跡の約60パーセントを占めている。その中でも中流域に集中する傾向があり、遺跡の数は約50箇所を数えることができる。

しかしながら、大野川流域でこれまで知られている旧石器時代の遺跡の多くは AT 堆積以後、すなわち、今から約2万1千前から1万数千年前までの石器群である。それ以前の旧石器文化の研究については良好な遺跡やまとまった石器群に恵まれる機会が少なく、研究がほとんど停滞しているという状況である。このことは、大分県下に限らず、九州地方の旧石器時代遺跡全般についていえることでもある。

このような現状にあって、3回にわたって実施された駒方古屋遺跡のAT 堆積以前の石器群の発見は、今後の研究の良好な基礎資料になるものと思われる。

駒方古屋遺跡の発掘調査は,第1次調査が昭和58年8月17日から30日,第2次調査が昭和59年8月25日から9月3日,さらに第3次調査を昭和60年8月23日から9月5日までそれぞれ実施し,調査の延べ日数は38日間である。

なお,第1次発掘調査の成果については,別府大学付属博物館から昭和60年2月に『駒方古 屋遺跡発掘調査報告書』として既に公表している。

また, 第 2 次・第 3 次調査の概要は「別府大学付属博物館だより」No.18 (59年12月)・No.21 (60年11月) で速報として報告している。

今回の報告書は、第2次調査・第3次調査で実施した、駒方古屋遺跡第2地点の成果をまとめたものである。

第 I 章 遺跡の環境

大野川は九州のほぼ中央にそびえる祖母・傾山系の北麓に源を発し、さらに阿蘇や久住の山裾からも多くの支流を集めて、大分県のほぼ中央を東流して別府湾に注ぐ県下最大の河川である。この大野川の流域一帯には阿蘇溶結凝灰岩が広く覆っており、それらが大野川の本流や多くの支流によって侵食され、複雑な舌状台地が展開している。この台地上には阿蘇山や久住山など県下の火山は無論、遠く鹿児島県の火山を起源とする降下堆積物 (テフラ) が厚く堆積している。

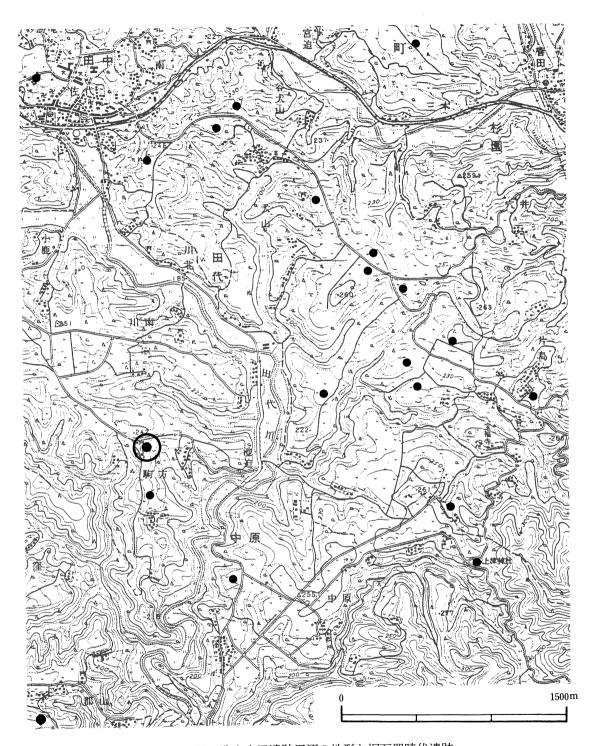
大野川中流域の北側に位置する大野町の、南半分には、標高200~300mの凝灰岩台地が開けており、一般に「大野原」あるいは「大野原台地」と呼ばれている。台地は南北・東西ともに幅が約6kmであり、阿蘇山の噴火活動に伴う火砕流(Aso-4)の堆積によって形成されたものである。この台地は茜川水系の北東部と平井川水系の南西部とに大きく分けることができる。

大野原台地の南西部は平井川の支流である田代川がほぼ南北に貫流しており、その西側に平行して広がる複雑な形の舌状台地のほぼ中央に駒方古屋遺跡が立地している。その標高は約238 mである。

駒方古屋遺跡が所在する「大野原台地」では、これまでの発掘調査・試掘調査ならびに分布調査の結果、50箇所を超える旧石器時代遺跡が確認されている。大野川中流域のみならず東九州地域において、旧石器時代遺跡がもっとも集中している地域として注目される。旧石器時代の遺跡は標高200~300mの大野原台地のほぼ全域に認められるが、特に田代川を挟んで、その東西の両台地に集中する傾向がうかがえる。

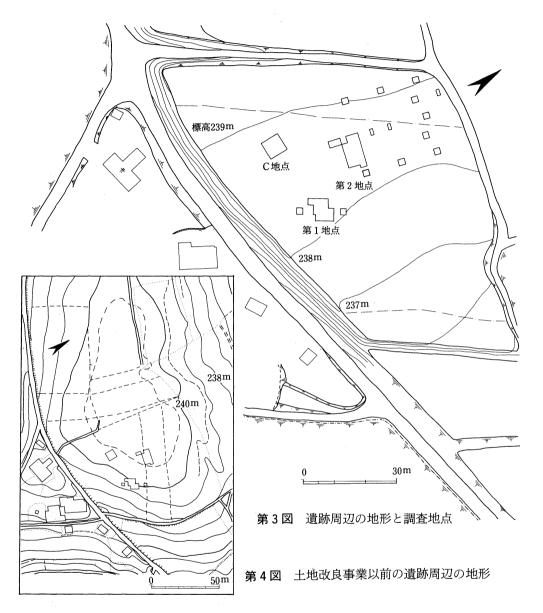


第1図 大野川流域の地形と駒方古屋遺跡



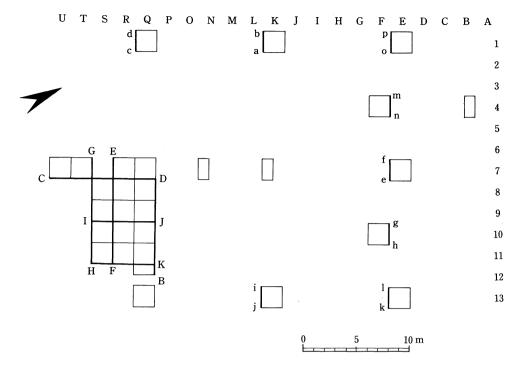
第2図 駒方古屋遺跡周辺の地形と旧石器時代遺跡

第II章 調査区の設定



遺跡のあるこの舌状台地は昭和40年度より開始された大野原一帯の畑地総合土地改良事業の一環に組み込まれ、昭和50年に工事が実施された。この工事によって遺跡に隣接する台地の中央部が1m前後削平され、それらの土は台地周辺に客土としてならされている。そのため工事後の台地は平坦になっている。

第4図は駒方古屋遺跡のある台地の工事以前の地形図である。ほぼ南北に延びる独立丘稜状の台地であったことがよくわかる。また、昭和49年から50年にかけて県文化課が調査を行った



第5図 第2地点の調査区と土層観察地点

駒方C地点および今回の駒方古屋遺跡ともに、台地の東南部にあたり、しかも中央部から緩斜面にかけて中間に占地していることを知ることができる。

駒方古屋遺跡の第1次発掘調査は、大分県文化課が調査を行った駒方遺跡C地点での石器群の出土層位および遺物包含層の広がりの把握をめざして実施した。調査区の設定については、県の文化課が調査した台地の中央部付近は、圃場整備の工事によって、遺跡包含層が予想された黄褐色土層とさらにその下位の黒色帯の一部まで削平を受けていたため、東南側のやや斜面よりに設けた。

 5×5 mのメインとなる調査区1 つと,それに接するように 2×2 mの調査区を設定して,石器群の広がりと土層観察を行った。この第1 地点の発掘総面積は53m²である。

第 2 次発掘調査では、遺跡の広がりを確認するために、台地の北側と中央部に 2×2 mの調査区を13区と土層観察のため 1×2 mの調査区を 3 区発掘した。総面積は56m°である。

調査区の設定は、圃場整備事業による削平を比較的受けていない北西部分を対象として、北から南に向けて $A \cdot B \cdot C \cdots U$ 、これに直交して西から東へ向けて $1 \cdot 2 \cdot 3 \cdots 13$ となる調査網を設けた。第 2 次発掘調査で実質的な成果が認められたのは、台地のほぼ中央にあたる $Q - 10 \cdot R - 10 \cdot T - 7 \cdot U - 7$ の各調査区である。これらの調査区は、県文化課の試掘調査でのC地点IV区、付属博物館の第 1 次発掘調査の第 1 地点とではそれぞれ $18 \sim 20$ mの間隔がある。

第3次調査は,第2次調査で石器群が比較的まとまって出土した台地のほぼ中央部にあたる $R-10 \cdot Q-10$ グリッドを中心に,約48㎡の発掘を実施し,第2地点とした。

第Ⅲ章 基本層序

第6図は駒方古屋遺跡における基本層序である。第1地点第6調査区を中心に,第2地点の 土層を参考にして作成した。

I 層 圃場整備事業による客土であり、土質および土色から3層に分けられる。

Ia 層 灰褐色土層 現在の耕作土である。 $2 \sim 3 \, \mathrm{cm}$ ほどの黄褐色の粒子が混入しており軟質である。ローリングを受けた縄文土器片を含んでいる。この土層は、遺跡全体を約 $20 \sim 30 \, \mathrm{cm}$ の厚さで覆っている。

Ib 層 黒色土層 硬質の黒色土の中に, 黄色土がブロック状に点在している。第1地点のAグリッドの南西隅に約10cmの厚さで確認された。

 $Ic \ Parameter Parameter Parameter Ic \ Parameter Pa$

II層 漆黒色土層 アカホヤ下位に見られるクロボクで,縄文早期の基本的な遺物包含層であるが,当遺跡では無遺物層である。下部にいくにしたがって,黄色味が強くなる。B-4・E-1・E-13・F-10グリッドで認められるが,場所によってはIc層とIII層が混入している。

III層 明茶褐色土層 いわゆるソフトローム層である。全体的に軟質で明るい色調をしている。この層からVIII層にかけて遺物が出土する。この層からの遺物出土数はごくわずかである。主に当遺跡の東北部で認められる。そこでも削平により上部が失れているため厚さはまちまちであるが、厚いところで約30cmである。昭和49年に大分県文化課の調査で上部石器群が包含されていた層と同一と考えられる。なお、このIII層下部からV層上部にかけてが、岩戸I文化層を包含しているローム層の第II層に比定できるものと考えられる。

IV層 暗茶褐色粘質土層 III層のソフトローム層から V層のハードローム層への漸移的な層である。この層の上部まで削平を受けている所では,一部客土が混入している。 $N-7 \cdot K-7$ グリッド以外の全調査区で認められる。場所により,厚さには偏りがあるが,約20cmの厚さがある。遺物包含層である。

V層 暗黄褐色土層 いわゆるハードローム層である。この層が駒方古屋遺跡第 2 地点第 1 文化層を包含する層である。IV層に比べて硬く,色調もやや暗い。 $N-7 \cdot K-7$ グリッド以外の全調査区で認められるが,厚さは一定ではなく,約 $20\sim60$ cm の幅がある。この層は,百枝遺跡のIII層に比定できよう。また, $III\sim V$ 層が,大野原台地の基本層序のV層に比定できる。

VI層 黄褐色土層 姶良カルデラを起源とする AT (姶良丹沢火山灰) の風化土層と考えられる。黄色味が強く,サクサクとした手ざわりである。 $N-7 \cdot K-7$ グリッド以外のグリッドでは,小さなブロック状となって V 層下部に点在している。いっぽう $F-4 \cdot Q-9 \cdot Q-12 \cdot S-10$ グリッドでは,比較的大きなブロックとして存在する。百枝遺跡の V 層に比定できよう。

VII層 暗褐色土層 VIII層の黒褐色土層への漸移的な層である。この層で当遺跡第1地点および第2地点第2文化層の遺物の出土数がピークを向える。暗褐色の層中に,ATと思われる白黄色を呈するブロックを含んでいる。 $K-7 \cdot N-7$ グリッド以外の全調査区で認められた。約20cmの堆積状態を呈する。岩戸遺跡の第III層,百枝遺跡のV層に対比できよう。

VIII層 黒褐色土層 大野川流域で一般的に見られる,「黒色帯」または「暗色帯」と呼ばれる 土層である。この層の上部まで遺物が出土している。粘性は少なく,サラサラとしている。粒 子は細かい。大野原台地の基本層序では第VI層,岩戸遺跡では第IV層,百枝遺跡ではVI層に相 当する。大分県文化課が昭和49年に調査した駒方 C 地点では,当遺跡における V 層からこの VIII 層上部にかけて遺物が出土している。標準的厚さは,30~40cm程度である。当遺跡の全調査区 に認められた。

Ia 灰褐色土層 Ib 黒色土層 Ic 黒色土層 II 漆黒色土層 III	* * * *
Ic 黒色土層 II 漆黒色土層 III 漆黒色土層 (S. L) IV 暗茶褐色土層 (S. L) IV 暗茶褐色土層 (H. L) VI 黄褐色土層 (AT) VII 暗褐色土層 VIII 黒褐色土層 (B. B) IX 褐色土層 X 明黄褐色土層 XI 明黄褐色土層 XII 暗茶褐色土層 XII 暗茶褐色土層 XII 皆茶褐色土層	Ia 灰褐色土層
II	Ib 黒色土層
III 明茶褐色土層 (S. L) IV 暗茶褐色粘質土層 V 暗黄褐色土層 (H. L) VI 黄褐色土層 (AT) VII 暗褐色土層 VIII 黒褐色土層 (B. B) IX 褐色土層 X 明黄褐色土層 XI 明黄褐色土層 XII 暗茶褐色粘質土層 XIII 暗茶褐色粘質土層 XIII 褐色土層	Ic 黒色土層
IV 暗茶褐色粘質土層 V 暗黄褐色土層 (H. L) VI 黄褐色土層 (AT) VII 暗褐色土層 VIII 黒褐色土層 XI 現黄褐色土層 XI 明黄褐色土層 XII 暗茶褐色粘質土層 XIII 褐色土層 XIII 褐色土層 XIII 褐色土層	II 漆黒色土層
V 暗黃褐色土層 (H. L) VI 黄褐色土層 (AT) VII 暗褐色土層 VIII 黒褐色土層 (B. B) IX 褐色土層 X 明黄褐色土層 XI 明黄褐色土層 XII 暗茶褐色粘質土層 XIII 褐色土層 Δ Δ Δ XIV 黄白色土層 (Kjp1) Δ	III 明茶褐色土層 (S. L)
VI 黄褐色土層 (AT) VII 暗褐色土層 VIII 黑褐色土層 (B. B) IX 褐色土層 X 明黄褐色土層 XI 明黄褐色土層 XII 暗茶褐色粘質土層 XIII 褐色土層 XIII 褐色土層 XIV 黄白色土層 (Kjp1) △	IV 暗茶褐色粘質土層
VII 暗褐色土層 VII 黒褐色土層 (B. B) IX 褐色土層 X 明黄褐色土層 XI 明黄褐色土層 XII 暗茶褐色粘質土層 XIII 褐色土層 XIII 褐色土層 A A A A A A XIV 黄白色土層 (Kjp1) A	V 暗黄褐色土層 (H. L)
VIII 黒褐色土層 (B. B) IX 褐色土層 X 明黄褐色土層 XI 明黄褐色土層 XII 暗茶褐色粘質土層 XIII 褐色土層 A A A A A A A A A A A A A A A A A A A	VI 黄褐色土層 (AT)
IX 褐色土層 X 明黄褐色土層 XI 明黄褐色土層 XII 暗茶褐色粘質土層 XIII 褐色土層 Δ Δ Δ Δ Λ Λ Λ Λ Λ Λ Λ Λ Λ Λ Λ Λ Λ Λ Λ	VII 暗褐色土層
X 明黄褐色土層 XI 明黄褐色土層 XII 暗茶褐色粘質土層 XIII 褐色土層 Δ Δ Δ XIV 黄白色土層 (Kjp1) Δ	VIII 黒褐色土層 (B.B)
XI 明黄褐色土層 XII 暗茶褐色粘質土層 XIII 褐色土層 Δ Δ Δ Δ Δ XIV 黄白色土層 (Kjp1) Δ	IX 褐色土層
XII 暗茶褐色粘質土層 XIII 褐色土層 Δ Δ Δ Δ Δ XIV 黄白色土層 (Kjp1) Δ	X 明黄褐色土層
XIII 褐色土層 Δ Δ Δ Δ Δ Δ Δ XIV 黄白色土層 (Kjpl) Δ	XI 明黄褐色土層
Δ Δ Δ Δ Λ XIV 黄白色土層 (Kjp1) Δ	XII 暗茶褐色粘質土層
XIV 黄白色土層 (Kjp1) Δ	XIII 褐色土層
	Δ Δ Δ Δ
^ ^ ^	XIV 黄白色土層 (Kjp1) Δ
	ΔΔΔΔ

第6図 基本土層柱状模式図

IX層 褐色土層 VIII層から X層へかけての漸移的な層である。 X層と比較して粒子が粗く,全体的に硬くしまっている。この層以下は,無遺物層である。第 1 地点第 6 調査区と第 2 地点の $K-7\cdot N-7\cdot Q-8\cdot Q-9$ グリッドで,約20cmの厚さで認められた。これら以外の全調査区では,この層まで掘り下げていないので未確認である。岩戸遺跡では,第 2 文化層の第 V 層,百枝遺跡では,V III 層に対比できるであろう。

X層 明黄褐色土層 色調は,下部にいくにしたがって 黒味が強くなる。下部にXI層に見られるパミスが混入して いる。 $N-7\cdot K-7\cdot Q-8$ グリッドで層として,約30 cmの厚さで認められるいっぽう,U-7グリッドでは,IX層中にブロック状に認められる。

XI層 明黄褐色土層 X層に比べると硬質である。色調はX層と同じであるが, $1\sim3$ mm程度のパミスをブロック状に多く含んでいる。約20cmの厚さがある。なお,この層以下は,第1地点第6調査区で確認したものである。

XII層 暗茶褐色粘質土層 黄色土に黒色土が混入したような土層である。粒子が細かく、粘性が強い。上部には、XI層に含まれるパミスが見られるが、下部にはそれとは異なるオレンジ色のパミスをブロック状に含んでいる。平均的な厚さは約40cmである。

XIII層 褐色土層 褐色を呈するが、やや茶色味がある。 VIII層に比べると硬くしまっている。 $4\sim5$ mm程度の赤いパミスが混入している。 XIV 層中に含まれる $2\sim3$ cmの風化礫

+ + = = =	第 1	地 点	第 2	地 点
基本層序	第1次調査速報	第1次調査報告書	第2次調査速報	第3次調査速報
Ia 灰 褐 色 土 層 (耕作土)	Ia 灰 褐 色 土 層	Ia 灰 褐 色 土 層 (耕作土)	Ia 灰 褐 色 土 層 (耕作土)	I 灰 褐 色 土 層 (耕作土)
Ib 黒 色 土 層	Ib 客 土	Ib 客 土	Ib 客 土	
Ic 黒 色 土 層	Ic 黒 色 土 層	dc 黒 色 土 層	Ic黒 色 土 層	
Ⅱ漆黒色土層			Ⅱ 漆 黒 色 土 層 (縄文早期包含層)	
Ⅲ 明茶褐色土層 (ソフトローム)			Ⅲa 明 黄 褐 色 土 層 Ⅲb 黄褐色土層(ソフトローム)	Ⅳ 暗茶褐色土層 (ソフトローム)
IV 暗茶褐色粘質土層	Ⅱ 暗茶褐色土層	Ⅱ 暗茶褐色土層	IV 暗黄褐色粘質土層 (漸移層)	
V 明 黄 褐 色 土 層 (ハードローム)		■ 黄褐色土層	V 暗黄褐色土層 (ハードローム層)	V 黄 褐 色 土 層 (ハードローム)
VI 黄褐色土層	Ⅲ 黄褐色土層 (AT風化土層)		VI 黄 色 + 層 (AT風化層)	
WI暗褐色土層	IVa暗褐色土層	IVa暗褐色土層	VIIa 暗褐色粘土層 (漸移層)	VIIa 暗 褐 色 土 層 (黒色帯への漸移層)
₩ 黒 褐 色 土 層 (黒色帯)	IVb 黒 褐 色 土 層 (黒色帯)	IVb 黑 褐 色 土 層 (黒色帯)	VIIb 黒色 + 層(黒色帯)	VIIb 黑褐色土層(黒色帯)
IX 褐色土層	IVc 褐 色 土 層	IVc 褐色土層	Words 色 土 層	VIc 褐 色 土 層 VIIc (VII層への漸移層)
X明黄褐色土層	V 明黄褐色土層	V明黄褐色土層	Ⅷ 褐色土層	
XI明黄褐色土層	VI 明黄褐色土層	VI 明黄褐色土層		
XII 暗茶褐色粘質土層	VI 暗黄褐色粘質土層	₩ 暗茶褐色粘質土層		
XIII 褐色土層	₩ 褐色土層	Ⅷ 褐色土層		
XIV 黄 白 色 土 層 (Kjpl)	IX 黄白色土層 (Kjpl)	IX 黄白色土層 (Kjpl)		:

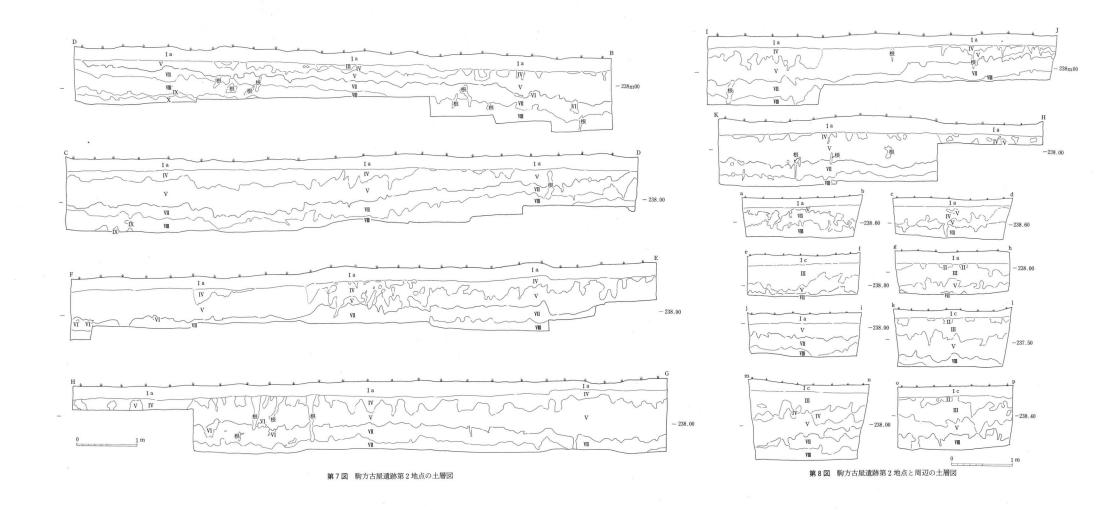
第1表 駒方古屋遺跡土層対比表

が見られる。厚さには偏りが見られるが約20~50cmの厚さを有している。

XIV層 黄白色土層 九重第1パミス (Kipl) の層である。粒子が比較的大きく、コロコロとした感じがある。黄色味が強く鮮かで、乾燥すると白色を呈する。通称「マメンコ」と呼ばれる。大野原台地の基本層序では、第Ⅷ層に相当する。

第7図は当遺跡第2地点における土層図である。第2地点における土層の堆積状態は,圃場整備事業により,大きく左右されている。つまり,旧地形において標高の高かった場所は大きく削平を受けている。 $K-7\cdot N-7$ グリッドがそれにあたる。他のグリッドも多かれ少なかれ削平を受けている。 $R-10\cdot Q-10$ グリッドを中心とする地点では,北東へいくにしたがって削平を大きく受けており,Q-7グリッドが最も大きく削平を受けている。また,S-11グリッドも比較的削平を受けていた。つまり,旧地形においてQ-7グリッドが最も高く,その次にS-11グリッドが高かったと考えられる。その間のグリッドでは, $R-10\cdot Q-10$ グリッドが削平をあまり受けておらず, $Q-7\cdot S-11$ グリッドの方向へ,土層はなだらかに登っている。いっぽう最も削平を受けていないのは,Q-12グリッドで,IV層が削平されず残っており,この第2地点については,比較的煩雑な起伏があったと考えられる。

実際に土層図を見た場合、Ia 層の直下がII 層ではなく、IV 層やV 層となっているものが多い。これは、土層そのものについて、第1 地点も含めた全調査区において、1 つの復元層序である基本層序を作り、共通の通しでの土層名を付したためである。



第IV章 石器群の遺存状況

第1節 遺物包含層と広がり

駒方遺跡 C 地点の調査では、表土層・黄褐色土層上部(基本層序のIII層~IV層)と黄褐色土層下部 (VI層)・黒色土層 (VII層~WI層)上部の2つの異なる土層において石器群が発見された。特に、下部の石器群の一部は焼土とピットに伴って6×6mの調査区の東北隅で扇状の広がりで発見されている。石器群の分布状況から、石器群の1つの完全な集中とは考えられず、おそらく分布域の3分の1なり、4分の1くらいにあたるのであろう。

次に,第1次調査での駒方古屋遺跡の第1地点は,C地点の東南約20m離れた地点である。当地点では黒色帯への漸移層である暗褐色土層(VII層),ATが風化土壌化した土層と考えられる黄褐色土層(VII層),さらに黒色帯である黒褐色土層(VII層)から石器群が発見されている。これらの3つの異なる土層中から石器群が出土しているが,接合資料および石質別資料の垂直分布ならびに平面分布の分析・検討から1つの文化層として把握される。石器群の広がりは,約 5×3.5 mのやや集中する箇所を含む約 10×5 mの範囲から出土しており,1つのブロック(ユニット)と考えられる。当ブロックの平面的な分布およびその位置から,C地点のブロックの一部とは別なブロックとしてとらえられる。

第2次・第3次調査での駒方古屋遺跡第2地点における石器群は、III層下部からVII層上部にかけて出土している。文化層の認定そのものについては後に譲るが、結論から先に述べると、第2地点ではV層を主体とする第1文化層が $T-7\cdot U-7$ グリッドを中心に包含されており、VII層を主体とする第2文化層が $R-9\cdot R-8$ グリッドと $Q-11\cdot Q-12$ グリッドの2つの遺物集中の中心を持って包含されている。つまり、一連の遺物包含層の中に2枚の文化層が包含されていると判断できる。

当遺跡第1地点における遺物集中部分と第2地点のそれを比較した場合,層的には第1地点と第2地点第2文化層はほぼ同一であり,時間的にも近いと考えられる。

第2節 文化層の把握

駒方古屋遺跡の第 2 次・第 3 次発掘調査において284点の石器類が出土しており、そのうち274 点が今回分析対象の第 2 地点からの出土である。石器類の出土層は、黒色帯への漸移層である暗褐色土層 (VIII層) から121点、黒色帯である黒褐色土層 (VIII層) から19点、ハードロームである黄褐色土層 (VIII層) から97点、外にソフトロームからハードロームへの漸移層である暗茶褐色土層 (IVII層) から33点、ソフトロームである黄褐色土層 (IIII層) から4点、表採 3点である。

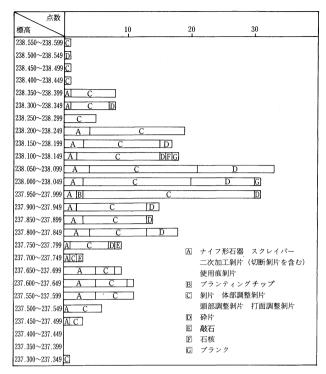
以上のように、VIME(AT)を除いたIIIMEからVIMMEまでの全ての層から石器類が出土しており、遺物包含層は50cm前後の厚さを持つ。これを1つの文化層としてとらえるか、複数の文化層で

あるかということが,石器群の ブロック認定や,他遺跡文化層 (駐1) との比較,そして位置づけなど を行う時の基本的問題となる。

この包含層の石器群を,器種別・石質別の垂直グラフ・層別グラフ・接合資料などを用いて文化層の認定を行うことにしたい。

器種別垂直グラフでは、剝片と砕片のピークが標高238.050~238.099mを頂点に一箇所あった。石質別垂直グラフでは、流紋岩のF類・黒曜石が標高237.950~238.099m、C類は標高237.550~237.699mと2つのピークが見られる。しかし当遺跡では、傾斜があるため、垂直グラフでは、文化層の把握、そして傾向さえつかみにくいので、次に出土層から考えることにする。

各層出土の石器組成表(第7表)では、V層に剝片と砕片、VII層にツゥールと剝片の2つのピークが見られる。石質別の出土層位グラフでは、黒曜石はV層に、そしてC類・D類・F類は、VII層にピークがあった。これら出土層のあり方に、黒曜石の石器群の大半が、剝片と砕片である(第2表)ということを考え合わせると、V層に剝片と砕片で構成される黒曜石の石器群のピークがあり、VII層にツゥ



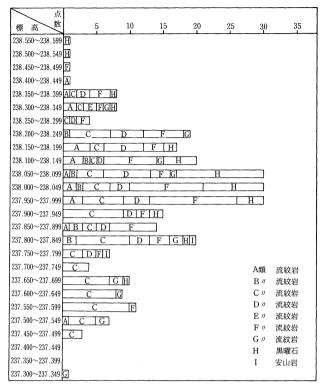
第9図 器種別垂直グラフ

	٠,				~	h.i			lor	74				Γ_
番 看	ナイフ形石器	スクレイパ	二次加工剝片	使用痕剝	ブランティングチップ	剝	体部調整剝	頭部調整剝	打面調整剝	砕	敲	石	ブラン	石質別合
質	器	ĺ	片	片	エップ	片	片	片	片	片	石	核	2	計
Α	3			2		12	2							19
В		1	1			3			1	2				8
С	4	1	5	11	1	41	7	3	4	6		1		84
D			1	2		25	2	6		2				38
Е						2								2
F	4			1		49	5			4		1		64
G	1			4		7	1		1					14
Н	1					14	2			22			2	41
I											2			2
不明						1				1				2
器種別合計	13	2	7	20	1	154	19	_9	6	37	2	2	2	274
								A 類 n n n n	流	 紋		F類 G " H I	黒	紋岩 『曜石 山岩

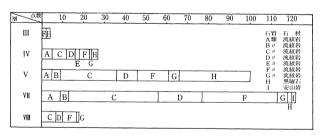
第2表 石質別石器組成表

ールと多くの剝片を持つ流紋岩C類・D類・F類のピークがあるということがわかる。

器種別平面・垂直分布図 (接合のみ) (付図IV) では黒曜石石器群の接合はなく,いっぽう流紋岩



第10図 石質別垂直グラフ



第11図 石質別の出土層位グラフ

A類~G類の石器群は包含層の 上部から下部にかけての接合が 多く見られ、流紋岩A類~G類 の石器群は1つであると考えら れる。

以上, 黒曜石の石器群が, 流 紋岩の石器群よりも層位的に新 しく, 平面的にも2つの石器群 の間には距離があり, 石器組成 の点でも大きく異なることか ら,駒方古屋遺跡第2地点では, 上部に黒曜石の石器群(駒方古屋 第1文化層), 下部に流絞岩の石 器群(駒方古屋第2文化層)という 2枚の文化層の存在が考えられ る。

駒方遺跡の文化層は、駒方古屋遺跡第1地点と駒方C地点がすでに提示されている。第1地点では、IV層からIX層上部が出土層であるが、文化層の主体はATより下のVII層(黒色帯への漸移層)である。石器組成中の主なツゥールはナイフ形石器で、両設打面の石核による縦長剝片剝離技術を多用している。この第

1地点と駒方C地点の下部石器群は,出土層位がC地点の方がV層上部~VII層上部とやや上である。しかし文化層の主体はいずれもVII層であり,石器組成など石器群の内容も非常に類似しており,時期差はほとんどないと思われる。次にC地点と第1地点を今回調査の第2地点の駒方第2文化層と比較すると,3者ともVII層を文化層の主体とし,時期的には接近すると考えられるが,第2地点の駒方第2文化層では単設打面の石核による縦長剝片剝離技術を多用し,両設打面はごくわずかしか見られないなど石器群の内容の違いから同一の時間とは決め得なかった。

これらの石器群の時間差は、非常に微妙なものであり、文化層として区分するほどの差ではない。しかし、文化層の主体であるVII層について詳しく見ると、第1地点はVII層上部、第2地

点第2文化層はVII層下部である。層位的には、駒方遺跡の各文化層は第2地点第1文化層が最も新しく、次にC地点・第1地点、そして第2地点第2文化層が最も古いようである。

- 註1 ここで、ブロック(ユニット)という概念は、純粋な見かけ上の遺物の集中としてだけではなく、第 2 地点において、把握することが可能な有機的要因(石質、出土層位、接合関係等)を加味して設定 したものである。なお、当遺跡の石器群については「ブロック」の用語を用いる。
- 註2 当遺跡から出土した石器類の石材は流紋岩・黒曜石・安山岩の3種類であった。これらの石材が、さらに以下の外観的特徴から、細分されたものが石質である。流紋岩についてはA類~G類の7類に分けられたが、G類についてはA類~F類のいずれの石質にも含まれないものの集まりとなった。なお、黒曜石・安山岩については、1石材が1石質となる。

石質の外観的特徴

流紋岩

- A類 資料数は19点である。全体的に黄灰色で、黒い流状の模様が複雑に見られる。(1次調査の a類に相当する。)
- B類 資料数は8点である。暗黒灰色で、表面がやや粗い。(1次調査のb類に相当する。)
- C類 資料数は84点である。全体的に褐色で、表面はなめらかである。一般にホルンフェルスと呼ばれているものである。(1次調査のd類に相当する。)
- D類 資料数は38点である。全体的に暗褐色から茶褐色・黄灰色と、多くのバリエーションがあり、黒い流状の模様が見られる。節理面が顕著に見られ、風化が激しい。
- E類 資料数は2点である。緑っぽい黒色で、燈々色の不純物が線状に見られる。
- F類 資料数は65点である。全体的に灰色で、青灰色の帯状の模様が見られる。
- G類 資料数は12点である。A類~F類のどの石質にも含まれなかったものの集まりで、外観的特徴は後で述べる個体別資料の外観的特徴のNo.17~No.23を見ていただきたい。
- 黒曜石(H) 資料数は41点である。黒色を呈し、風化が激しく、白色の不純物が多く見られる。
- 安山岩(I) 資料数は2点である。青灰色で白色と黒色の斑晶が見られる。
- 註3 坂本嘉弘・吉留秀敏 「駒方C遺跡の調査」『大野原の先史遺跡』大分県教育委員会 1984年。 橘 昌信 『駒方古屋遺跡発掘調査報告書』別府大学付属博物館 1985年。
- 註4 本書で用いる駒方C地点は駒方C遺跡IV区をさす。

第3節 ブロック(ユニット)の設定

先土器 (旧石器) 時代の遺跡を発掘すると、石器を主とする遺物の分布が平面的に、そして垂直的にある偏りをもつことがわかる。このことは従来より指摘されていることで、人間の生活活動の一側面を現しているものと考えられている。この解決にあたって、一般にはまず、遺物の分布状態をいくつかのまとまりに分類 (ブロック・ユニットの設定)を行うことから始められる。当遺跡における遺物の分布状態を多角視し、分類を行い、遺跡の構造を少しでも迫ってみたい。

ここで分析対象とする石器群は第2地点出土の274点である。平面・垂直分布図(石質・器種・層・接合・接合剝離順・個体)の外、各グラフ・表を用いて分析を行うことにする。

なお, $T-7 \cdot U-7 \circ U-7 \circ U$ ッドを中心とする黒曜石の石器群 (駒f古屋第1文化層) をも含めて,ブロック (ユニット) の設定を行いたい。

まず、石質別平面分布図 (付図I) に注目したい。第2地点 (第2次調査) において黒曜石を石材とする石器類の出土をみたが、これは大野川流域における石材利用という点で注目されるものである。実際出土地点が一箇所に集中すること、出土層位にも偏りがあること、剝片類で大半を占めることなど、駒方遺跡 C地点・第1地点の石器群の内容と大きな差をもつことが発掘中より推測された。

ここで、石材別あるいは石質別といった分布がブロックとして認定する際の一基準となり得るのではないかと考え資料操作を試た。

41点の黒曜石の内、39点が $T-7 \cdot U-7$ グリッドに集中し、しかもその中に限られることがまず目をひく。流紋岩においては、C類は全域に分布するが、 $Q-11 \cdot Q-12$ グリッドを中心とすること、F類についてはR-8グリッドを中心としながらも東側へ拡がり、R-10グリッドまで分布することが分かる。しかし、細かくみるとこのF類はR-9グリッド付近を境として西側と東側へほぼ2つに分かれる。石材・石質という観点から第2地点出土の石器群は、3つないし4つに分類できる。

次に器種別平面分布図 (付図II) を見ることにしたいが, $R-10 \cdot Q-10$ グリッドでは石核・ 敲石を含むツゥール類が顕著であった。当遺跡の石器組成は,剝片・砕片を中心とするが,ツゥール類の分布は偏る傾向にあり,「場の機能」という問題において発掘時より各器種における 分布状況に注意が払われていた。以下に詳しくみてみたい。

まず、剝片が全域に分布することが分かるが、特にR-8グリッドを中心とした西側に集中する傾向にある。また、R-8グリッドを中心としてナイフ形石器の集中も認められる。 $U-7 \cdot T-7$ グリッドを中心とする石器群はその大半が砕片で占められ、外に剝片があるのみである。R-10グリッドを中心として石核・敲石を含むツゥール類が集中する。このR-10グリッドを中心とした出土石器は少ないが、石核・敲石の外、ナイフ形石器・二次加工剝片・使用痕剝片、そしてブランティングチップという器種をみることができる。

Q-12グリッドを中心とする石器群については、器種ごとにまとまるといったことはないが砕片からツゥールまでの器種が揃って分布することが分かる。体部調整剝片については、絶対数が少ないとはいえ、 $R-9 \cdot R-10$ グリッドを中心にひとまとまりとなる傾向にある。

ここで、各グリッド・各層別の石器組成表(第3表)をみてみたい。

R-8グリッドでは、VII層においてナイフ形石器・剝片の最大値があり、IV層・VIII層からもナイフ形石器・スクレイパー・二次加工剝片・石核の出土をみている。つまり、剝片類・ツゥール類共に多く認められるのである。Q-12グリッドでは、VIII層において二次加工剝片・使用痕剝片が顕著である。Q-11グリッドでは、VIII層でナイフ形石器・スクレイパーをみることができる。そしてU-7・T-7グリッドのV層において、剝片が比較的多く出土すると共に、砕片の出土数は最大となる。

以上,各器種の分布をみてきたが,ツゥール類がR-10グリッドを中心とする中央部に分布することは,これだけでブロック(ユニット)の設定まではいかないまでも注目されるものであり,他の分析とあわせてブロック(ユニット)設定を行う際の重要な観点となると思われる。この段階では,3つないし4つの石器群集中部をみることができる。

次に層別平面分布図(付図III)を みてみると、IV層出土の石器群が R-10グリッドを中心に分布する ことが分かる。V層出土のものは、 $U-7 \cdot T-7$ グリッドを中心と しながら、東側 $\alpha R - 8 \cdot R - 9$ グリッドまでみられる。VII層出土 の石器群は、 $Q-11 \cdot Q-12$ グリ ッドを中心にするもの、R-8グ リッドを中心とするもの、そして $R-10 \cdot Q-10$ グリッドを中心と するものの3箇所に集中がみられ る。以上を,大きくとらえると, $T-7 \cdot U-7$ グリッドにV層出 土の石器群が多く,他のグリッド ではⅢ層~Ⅷ層出土の石器群がみ られる中、特にVII層出土のものが 多いことが分かる。出土層からみ ると石器群は2大別できる。

ブロック (ユニット) の設定において,接合関係をみることは重要かつ最良の方法である。ここでは器種別平面・垂直分布図 (接合のみ) (付図IV)・個体別平面分布図 (接合

層	器種グリッド	ナイフ形石器	スクレイパー	二次加工剝片	使用 痕剝片	ブランティング チップ	剝片	体部調整剝片	頭部調整剝片	打面調整剝片	砕片	敲石		ブランク	計
Ш	E-7 T-7 S-8	-					1 2	1			1				2 2 2
IV	S-9 S-10 R-7 R-8 R-9 R-10 Q-10 Q-11 Q-12	1 1			2		1 1 1 13 4 5	2 1 1	4		2				2 1 1 22 4 8 1 2
V	E-7 U-7 T-7 S-8 S-9 S-10 R-7 R-9 R-11 Q-8 Q-9 Q-10 Q-11 Q-12	1			1 3		7 7 5 3 1 5 1 4 3 2 1 4 5	1 1 2	2	1	14 4 2			2	1 22 13 7 4 1 2 9 2 6 3 2 1 7
VII	S-8 S-9 R-7 R-8 R-9 R-10 R-11 Q-8 Q-10 Q-11 Q-12	1 3 1 1	1 1	1 1 1 1 1 3	1 2 1 2 4	1	4 2 1 36 6 3 2 1 8 4	1 1 1 1 3 1	1	1 1 2	5 1 1	2	1		5 3 1 45 11 6 1 7 8 17
VIII	R-8 R-9 R-10 Q-11 Q-12	1			1		5 3 2	1	1		2		1		9 1 2 4 3
表採計		13	3	8	20	154	1 21	9	6	38	2	2	2	2	3 280
ᄣ		0	9			101									1-00

第3表 各グリッド・各層別の石器組成表

のみ)(付図V)を見ていきたい。

 $U-7 \cdot T-7$ グリッドを中心とする石器群には接合関係はみられなかった。接合関係は $U-7 \cdot T-7$ グリッド以外,つまり流紋岩を主体とする石器群にのみ認められるものである。それは,R-8グリッドを中心とするもの,R-10グリッドを中心とするもの,Q-12グリッドを中心とするものの 3 箇所に大きくまとめられる。

ここで問題となるのが,R-10グリッドを中心とする接合関係がR-8グリッドを中心とした接合関係の一部なのか,それとも単独として成立し得るものかということである。R-8グリッドを中心とした接合関係は広範囲にわたり,その動きは繁雑であるのに対し,R-10グリッドを中心とする接合関係は小範囲で単純である。つまり,ほとんどが1点ずつの接合なのである。これを2つのブロック(ユニット)間の差とみるか,あるいは1つのブロック(ユニット)の,例えば「場の機能」の差とみるか,ここではその判断はできない。ただこの2つの接合関係を明確に分ける根拠は今のところ導き出せない。「場の機能」の差などという問題は別にして,大きく1つとしてとらえておきたい。

いっぽう,Q-12グリッドを中心とする接合関係は,この範囲内で 1 点を除き完結している。この 1 点は, R-8 グリッドにみられるが,小形の調整剝片でもあり,その原位置性は疑われる。この動きを接合剝離順でみると,大形の調整剝片(Q-12グリッド) \rightarrow 小形の調整剝片(R-8グリッド) \rightarrow 大形の調整剝片(Q-12グリッド)という順序である。そこでQ-12グリッドを中心とする接合関係は,単独として存在すると考えられる。しかし,このことがそのままブロック(2=ット)の設定にはつながらないことは,言うまでもない。

これまでみてきた通り, $U-7\cdot T-7$ グリッドを中心とする石器群は明らかに単独である。 1つのブロックとして認定できよう。外のグリッドの石器群については,二大別できそうである。 つまり,R-8グリッドを中心にR-10グリッドにまで拡がる一群と,R-12を中心とする一群である。以上のブロックの設定について,さらに個体別資料の分析をも含めて,考えたい。

第4節 個体別資料の分析

この分析法は,文化層の把握,石器の集中部の分類 (ブロック・ユニットの設定),さらに,剝片 剝離技術を含む石器類の動き等を検証できる,有効な方法である。以下,本遺跡における個体 別資料について述べることにする。

個体別資料の分類規定

接合関係を基本として、外に、色調・模様のあり方と色・光沢・不純物・節理の状態など肉眼観察によって分類を行った。

駒方古屋遺跡においては、個体別資料は母岩別資料と同じ意味である。母岩別資料という用語を用いなかったのは、接合資料の少なさと、部位によってかなり色や模様の入り方が違って

くるという石材のためであり、1母岩が複数の個体という可能性をもつからである。当遺跡では26の個体別資料に分類できたが、肉眼観察による分類であること、接合資料の少なさ、石材の特徴等により、個体数がさらに減る可能性もあることを指摘しておきたい。

次に各個体の外観的特徴を述べることにする。

個体別資料の外観的特徴

- No.1 4組の接合資料を含む15点からなり、石材は流紋岩A類。全体的にやや明るい黄灰色で、 部分的に黒っぽく、黒い流状の模様が複雑に見られる。
- No.2 4点の資料からなり、石材は流紋岩A類。全体的に黒灰色で、黒い流状の模様が複雑に見られる。
- No.3 8点の資料からなり、石材は流紋岩B類。全体的に暗黒灰色で、表面は粗い。
- No.4 12点の資料からなり、石材は流紋岩C類。全体的に暗褐色で表面はなめらかである。
- No.5 7組の接合資料を含む38点からなり、石材は流紋岩C類。全体的に褐色で、黒い斑点が見られる。
- $N_{0.6}$ 2組の接合資料を含む30点からなり、石材は流紋岩C類。全体的に明褐色で、表面はなめらかである。
- No.7 2点の資料からなり、石材は流紋岩C類。全体的に赤っぽい褐色で、表面は部分的に粗い。
- No.8 単独資料からなり、石材は流紋岩C類。全体的にやや赤っぽい暗褐色である。
- No.9 単独資料からなり、石材は流紋岩 C 類。全体的に黒灰色で、白灰色の斑点が散在する。 黒い流状の模様が見られ、表面はなめらかである。
- No.10 3組の接合資料を含む36点からなり、石材は流紋岩D類。全体の色は暗褐色から茶褐色、 黄灰色を呈し、部分的に流状の模様が見られる。節理面が顕著に見られ風化が激しい。
- No.11 単独資料からなり、石材は流紋岩D類。全体的に茶灰色で白色の斑点が見られる。
- No.12 単独資料からなり、石材は流紋岩 D類。全体的に暗灰色で黒い流状の模様が見られ、表面はなめらかである。
- No.13 2点の資料からなり、石材は流紋岩 E 類。全体的に緑っぽい黒色で燈々色の不純物が線 状に見られ、表面は粗い。
- No.14 2組の接合資料を含む28点からなり、石材は流紋岩 F類。全体の色は黒色から灰色で、 表面は全体的に粗いが黒色の部分はなめらかである。
- No.15 4組の接合資料を含む11点からなり、石材は流紋岩 F類。全体的に灰色で、黒灰色の帯 状の模様が見られ、表面はやや粗い。
- No.16 2組の接合資料を含む26点からなり、石材は流紋岩 F類。全体的にやや黄色っぽい灰色で、部分的に流状の模様が見られる。
- No.17 接合関係をもつ2点の資料からなり、石材は流紋岩G類。全体的に暗黒灰色で、白い縞

状の模様が見られ、表面はなめらかである。

- No.18 5点の資料からなり、石材は流紋岩G類。全体的に暗黒灰色で、部分的にむらが見られる。
- No.19 単独資料からなり、石材は流紋岩G類。全体的に暗黒灰色で縞状の模様が見られる。
- No.20 単独資料からなり、石材は流紋岩 G類。全体的に暗青灰色で流状の模様が見られる。
- No.21 単独資料からなり、石材は流紋岩G類。全体的に黒色で、白色の不純物が点在する。
- No.22 単独資料からなり、石材は流紋岩G類。全体的に黒灰色で、光沢があり、表面はなめら かである。
- No.23 単独資料からなり、石材は流紋岩G類。全体的に黒灰色でむらがあり、表面は粗い。
- No.24 40点の資料からなり、石材は黒曜石(H)。全体的に黒色で、白い不純物が多く見られる。 風化が激しく、透明感が失われている。
- No.25 単独資料からなり、石材は黒曜石(H)。黒色で透明感があり表面はなめらかである。
- No.26 接合関係をもつ 2 点の資料からなり、石材は安山岩(I)。全体的に青灰色で、白色と黒色の斑晶が見られる。

個体別資料の分析

さて、個体別平面分布図(付図VI)をみてみたいが、これは個体の構成数が5点を超えるものについてのみ行った。これをみる限り、個体 $N_0.5$ がQ-12グリッドを中心として東側へ偏ることが分かる。そして、R-8グリッドを中心に複数の個体が分布している。 $N_0.5$ をみることによって、Q-12グリッドを中心とする東側は一見分離されそうであるが、 $N_0.5$ はこの地域で完結するわけではなく、数点が他地域でも出土をみている。同様にQ-12グリッドを中心とする東側にも、R-8グリッドに中心をもつ個体がみられる。各個体の中心をみていく場合、 $N_0.5$ は、東側へひとまとまりとなることが言える。

ここで個体別石器組成表(第4表)に注目したい。まず、 $No.1 \cdot No.5 \cdot No.14$ はナイフ形石器をはじめとするツゥールを持ち、第2地点におけるツゥールの大半を占めていることがわかる。No.1はナイフ形石器が15点中3点を占め、使用痕剝片は2点認められる。No.5はツゥールから調整剝片までを持つが、特に5点もの使用痕剝片は注目される。No.10は剝片と調整剝片類で70%を占めるという特徴をもつ。No.14はナイフ形石器が2点みられるが、剝片を多くもつことが注目される。No.16もナイフ形石器を2点もつが、剝片・砕片で約90%を占める。No.24は剝片と砕片だけで、約90%を占めている。

これまでの観察結果から、 $U-7 \cdot T-7$ グリッドを中心とする石器群は、主に黒曜石という石材で構成されていること、器種が砕片・剝片に限られること、出土層のピークが外のグリッドとは異なること、外のグリッドとの接合関係が認められないことなどから、1つのブロックとして認定できる。このことは同時に文化層が異なることを示唆するものでもある。外のグリッド出土の石器群は、R-8を中心とするもの、Q-12を中心とするものに二大別できると

考えられる。これには,接合関係がそれぞれの範囲で完結すること,石器組成の面からも剝片からツゥールまでをもつこと,という共通性が見られる。個体別資料の分布において,No.5の分布の中心がQ-12グリッドを中心とした第2地点東側に偏ることは,ブロック(ユニット)設定の際の考慮に入れるべきものと考える。

このように、駒方古屋第 2 文化層を構成する流紋岩の分布は、Q-12 グリッドを中心に東側へ偏る一群 (第1 ブロック)、R-8 グリッドを中心に R-10 グリッドまで拡がる一群 (第2 ブロック) という 2 つのブロックに分けられよう。さらに、 $T-7\cdot U-7$ グリッドを中心とする一群を第 3 ブロックと呼んでおきたい。この第 3 ブロックは駒方古屋第 1 文化層として把握する。なお,第 1 ブロックについては,隣接する R-13 グリッド (\$2 次調査) から, 1 点もの遺物をみないことから,かなり限られた分布を示すことがいえる。

駒方古屋遺跡第1地点と第2地点は接合関係もみられず、個体別資料の共有もないことから有機的結合は存在しないと考えられる。

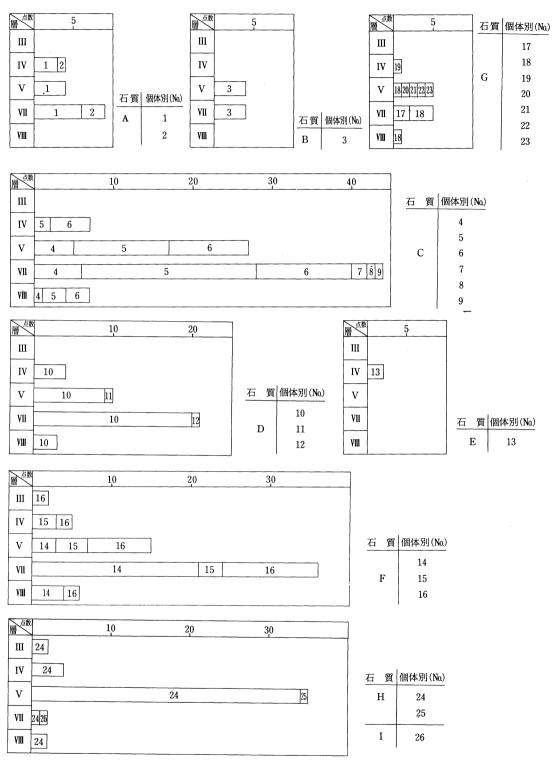
最後になったが、各表・グラフをみ ながらその傾向を示しておきたい。

器	ナ	ス	=	使	ブラ	剝	体	頭	打	砕	敲	石	ブ	個
∖種	イ	ク	次	用	2		部	部	面				ラ	体
個	フ	レ	加	痕	3		調	調	調				^	別
体 \	形石	イパ	工剝	剝	グェ		整剝	整剝	整剝				ン	合
別 No.	器器	1	片	片	ブランティングチップ	片	片	片	片	片	石	核	ク	計
1	3			2		9	1							15
2						3	1							4
3		1	1			3			1	2				8
4			1	4	1	4	1		1					12
5	2		2	5		19	4	2	3	1				38
6	1	1		1		19	1	1		5		1		30
7			1	1										2
8	1													1
9							1							1
10			1	1		24	2	6		2				36
11						1								1
12				1										1
13						2								2
14	2		1	1		19				4		1		28
15						9	2							11
16	2					21	3							26
17				1			1							2
18						5								5
19	1													1
20									1					1
21				1										1
22				1										1
23				1										1
24	1					13	2			22			2	40
25						1								1
26											2			2
個体別不明						2				1				3
器種別合計	13	2	7	20	1	154	19	9	6	37	2	2	2	274

第4表 個体別石器組成表

個体	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	不明	計
1	1			6	34	5	1	1	1	1						1	2	5					1		:		1	60
2	14	4	7	6	4	24	1			35	1	1	2	28	11	25			1	1	1	1		6		2	2	177
3			1			1		-																34	1			37
計	15	4	8	12	38	30	2	1	1	36	1	1	2	28	11	26	2	5	1	1	1	1	1	40	1	2	3	274

第5表 各ブロックにおける個体別資料



第12図 個体別資料の出土層位グラフ

まず,各ブロックにおける個体別資料(第5表)であるが,3つのブロックを点数の上からみたとき,第2ブロックが177点で,総点数の約60%を占める。点数上最も少ないのは,第3ブロックであるが,90%以上がNo24で占められている。第2ブロックはほとんどの個体を含むことが特徴であるが,そのうちNo.6・10・14・16でその内の約70%を占めている。第1ブロックは約半分の個体を含む

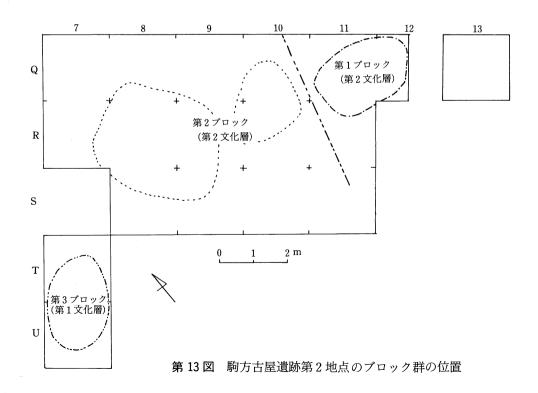
器種ブロック	ナイフ形石	スクレイパ	二次加工剝	使用痕剝片	ブランティングチ	剝	体部調整剝	頭部調整剝	打面調整剝	砕	高支	石	ブラン	ブロック別合計
Ź \		1	片	片	ップ	片	片	片	片	片	石	核	ク	計
1	3	1	3	10		28	6	2	3	4				60
2	10	1	4	10	1	112	11	7	3	14	2	2		178
3						14	2			19			2	37
器種別合計	13	2	7	20	1	154	19	9	6	37	2	2	2	274

第6表 ブロック別石器組成表

が、No.5 でその半数を占める。なお、No.5 は、第 2 ブロックでは 4 点であり、第 2 ブロック内に占める割合は約 2 %で、ほとんど無に等しい。

次に個体別資料の出土層位グラフ (第12図) に注目したい。

個体別における出土層位で特徴あることは、No.24の出土点数が、V層にピークをもつことである。外にV層出土の個体は $No.11 \cdot 15 \cdot 20 \cdot 21 \cdot 22 \cdot 23 \cdot 25$ があるが、このうち、 $No.21 \cdot 22 \cdot 23$ は使用痕剝片で、しかも 1 点で 1 個体であるという共通性を持つ。



第 V 章 駒方古屋遺跡第 2 地点の石器群

石器群の概観

駒方古屋遺跡第2次・第3次調査 第2地点で284点の石器類が出土した。石器類は、剝片・砕片が大半を 占め、典型的なツゥールとしては、 ナイフ形石器にほぼ限られている。 このあり方は、第1地点と類似している。いっぽう、石器群の出土層については、第1次調査の第1地点では、黒色帯からは遺物が出土しなか

_															
1	器種	ナ	スク	=	使	ブラ	剝	体数	頭部	打	砕	敲	石	ブ	'層
1	1111	17	シレ	次加	用痕	ンティ		体部調	調	打面調整				ラ	別
1	$ \ $	形石	イパ	工剝	級剝	プランティングチップ		整剝	整剝	整剝				ン	合
Ì	層	石器	1	片	片	ップ	片	片	片	剝片	片	石	核	2	計
١	III						2	1			1				4
	IV	3	4.	2			17	4	5		2				33
	V	1		7			55	4	2	2	24			2	97
	~ VII	8	2	7	10	1	70	8	1	4	7	2	1		121
1	, VIII	1	. 2		1		10	2	1		3		1		19
	計	13	2	7	20	1	154	19	9	6	37	2	2	2	274

第7表 各層出土の石器組成表

ったが、第2次・第3次調査の第2地点では、Ⅷ層(黒色帯)からの出土が見られる。

第1地点と比較して注意される点は,第2地点では黒曜石を用いた石器が見られ,さらに礫石器が出土したことがまず第1に挙げられる。典型的なツゥールはナイフ形石器に限られるとは言え,第2地点の石器群は,第1地点と比較して二次加工剝片・使用痕剝片も多く見られる。第2地点でのツゥールの内分けは,ナイフ形石器13点・スクレイパー2点・二次加工剝片7点・使用痕剝片が20点である。なお,使用痕のある剝片として認定したものは,微細な剝離が顕著に見られるものの外,二次加工としては認定し得なかったものなどが含まれており,「明らかに使用した痕跡を残す」というものに限ってはいない。しかし,第1次調査に比べて相対的に数が多いことは注意すべきことであり,二次加工剝片に対しても同じことが言える。

スクレイパーは,第1地点と同じで,不定形剝片の縁辺に刃部と考えられる加工が見られる 粗雑なものである。なお,表採資料の中に定形的なスクレイパーが1点ある。

ナイフ形石器は、一側縁加工・二側縁加工・部分加工の3種類が見られ、特に一側縁加工のものが多い。特記すべきものとして、先端までも細かく調整を行い、他の大部分も加工の認められる尖頭器としても認定できるようなものが2点出土している。詳しくは個別説明を参照されたい。

ブランティングチップと加工痕のある砕片が、各1点出土しているが、ナイフ形石器をはじめとするツゥールに関する砕片は、第1地点に比べて極端に数が少ない。なお、第1地点で認められた影器、グレイバースポールは1点もみられない。

第2地点において敲石の出土をみたが、これは駒方遺跡における礫石器の最初であり、やや小さめの円礫を使用している。以上、ツゥールの占める割合は、総出土数の約20%を占める。 外は剝片・砕片で占められている。これら剝片は、不定形なもの・やや縦長のもの・やや横長 といったもので占められる。

この外、打面調整・頭部調整・体部調整の剝片もそれぞれみられる。打面調整剝片から、第 2地点においては頻繁に、かつ大きく調整が行なわれたことを看取することができる。石核に 関しては、打面転位を頻繁に行っているものと単設打面のものとが各1点出土している。

接合資料の中には、ナイフ形石器と剝片の接合があり、ナイフ形石器の素材がよみとれる。また、石核と剝片の接合では、素材剝片の形状などがわかる好資料が出土している。

石材に関しては、第2表を使ってみてみたい。黒曜石が41点で全体の20%を占めた。外は全て流紋岩で、これは7つ以上に分けることができそうである。これらの石質をみていくと、黒曜石、流紋岩ではC類・D類・F類が比較的多く出土している。しかも、C類・F類で半数以上を占めることが分かる。また、石質別の総数にナイフ形石器・スクレイパー・二次加工剝片・使用痕剝片などの石器が占める割合は、黒曜石(2.4%)・A類(26.3%)・B類(25%)・C類(25%)・D類(10.5%)・F類(7.8%)・G類(35.7%)である。A・B・G類は、総数が少ない割りに、前に挙げた石器が占める割合が高くなっている。C類は、剝片類も、ナイフ形石器なども比較的多く出土し、A・B類と同じ割合を占めている。黒曜石、D・F類は、総数に対してナイフ形石器などの占める割合が少なくなっている。石核が出土している石質には、剝片が多く見られ、ナイフ形石器についても同様な傾向をうかがうことができる。

ここで、ブロック別石器組成表(第6表)を見てみたい。第1ブロック・第2ブロック・第3 ブロックとも剝片を主体とすることが、まず第1の特徴であろう。ただし、第3ブロックに限っては、外に砕片を多くもち、単純な石器組成を示している。第1ブロック・第2ブロックとも、砕片からツゥールまでという同様な傾向を示すが、数の上では第2ブロックがすべて上回っている。第1ブロックにおいては石核(残核)がみられないこと、打面調整剝片については、それぞれ3点ずつという同数の出土がみられることは注意すべきである。各層出土の石器組成表(第7表)については、黒曜石に左右されると考えられるが、V層に砕片が多くみられること、二次加工剝片はVII層にのみ見られることなどが指摘できよう。また、IV層~VIII層までみられるものとして、ナイフ形石器・使用痕剝片があることに注目しておきたい。

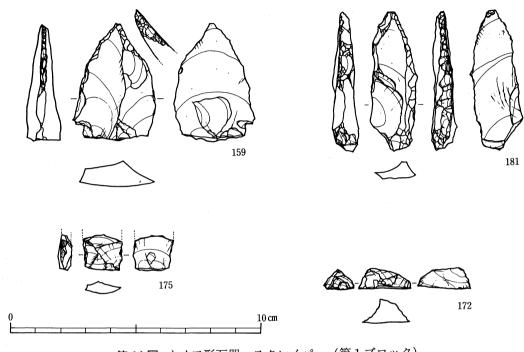
駒方古屋遺跡第2地点出土の石器群は、層位的に第1地点とほぼ同様で、AT降下堆積直前の時期が考えられる。石器群の内容は整ったナイフ形石器と縦長剝片剝離技術で代表される。

大野川中流域における旧石器時代の遺跡の中で、ATおよび黒色帯との層位的関係で、石器群が発見されており、しかもナイフ形石器と縦長剝片剝離技術が見られるものとして、駒方C遺跡・岩戸遺跡・百枝遺跡C地区を挙げることができよう。特に、駒方C遺跡の下部石器群と百枝遺跡C地点第3文化層の石器群は当遺跡の石器群との比較検討の上で重要視される。

- ○芹沢長介・柳田俊雄編『岩戸』東北大学考古学研究室考古学資料集第2冊 1978年
- ○坂田邦洋編『大分県岩戸遺跡』1980年
- ○清水宗昭・高橋信武・柳田俊雄編『岩戸遺跡発掘調査概報』清川村教育委員会 1980年
- ○清水宗昭·栗田勝弘·須田良平『百枝遺跡—C地区』三重町教育委員会 1985年

第1節 駒方古屋第2文化層

1. 第1ブロックの石器群



第 14 図 ナイフ形石器・スクレイパー(第 1 ブロック)

ナイフ形石器

159 厚手の剝片を素材とした一側縁と先端部加工のものである。打面・打瘤裂痕を残し、素材の形状をほとんど変えないまま、左側縁と右側縁上部に加工が施されている。加工は先端部までおよび全て腹面側からであり、特に先端部は入念に施されている。刃部は右側縁中部から下部にかけてと判断でき、刃こぼれが見られる。先端部の加工から尖頭器的な機能が考えられる。

181 左側縁の中ほどから下位に素材の縁辺を残し、外の部分の全てに加工が施されているナイフ形石器である。縦長剝片を素材としているが、素材の形状が大きく変わっている。打面・打点は、加工により除かれている。断面は四角形または台形状を呈し、比較的厚みを持っている。加工はほとんど腹面側から施されているが、左側縁基部に1枚だけ背面側からの剝離が見られる。また、先端部の腹面側に数枚の剝離が見られる。このことから腹面側の右側縁中ほどから下位に見られる剝離は、背面側より加工が施された際に欠損したものと思われる。159と同様、尖頭器的な機能が考えられる。

175 ナイフ形石器の基部である。素材の打面・打瘤裂痕を残している。左側縁に腹面側からの加工が施されている。欠損面の観察などから加工の際に上部が欠損したと考えられる。

スクレイパー

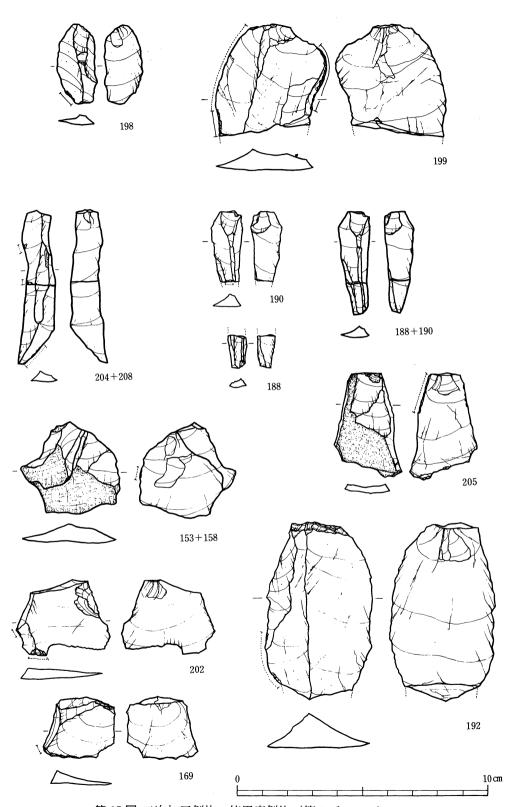
172 C類流紋岩で、剝片を素材としている。背面より一度切断し、旧背面側にノッチ状の剝離が施されている。一応、スクレイパーと考えた。

二次加工剝片

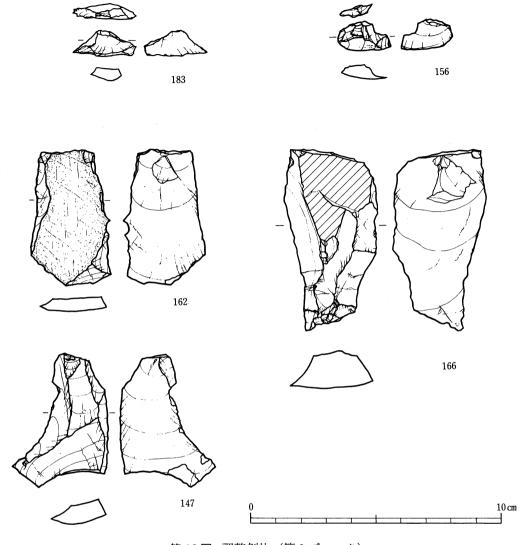
- 198 C類流紋岩で、打面を有する小形で薄い縦長剝片の左側縁下部に二次加工を施している。これは使用痕とも考えられるが、ここでは二次加工剝片として扱った。
- 199 C類流紋岩で、打面を有し均一の厚みをもつ縦長剝片を素材とする。背面左側縁下部と右側縁に整然と二次加工が施されている。なお、左側縁には微細な刃こぼれが観察できる。

使用痕剝片

- 204 208と接合する薄手の剝片で、背面右側縁下部に刃こぼれ状の剝離痕がみられる。
- 208 背面左側縁中部と下部に刃こぼれ状の剝離痕の認められる薄手の剝片で、打面を有する。
- 190 下部が欠損した剝片で、下部の折れた面に、小剝離痕が認められる。この剝片は188と接合する。
- 158 背面の大半に自然面を残すやや横長の剝片で,腹面の左側縁中部にわずかな小剝離痕が認められる。この剝片は153と接合する。
- 205 下部が打面部に比べ、やや広がる縦長剝片で、腹面左側縁上部には刃こぼれ状の剝離痕が認められる。この剝片の背面下端部、腹面下端部には節理面がみられる。
- 202 打面・打瘤を有する不定形の剝片で、背面下端部の狭い範囲に、やや大きめの小剝離痕が認められる。全体的に薄手の剝片である。
- 169 不定形の剝片で、背面下端部のやや左側部よりの小さく突出した部分に、小剝離痕がみられる。打面・打瘤を残し、上部が厚くて下部が薄くなる剝片である。
- 192 単剝離打面を有する大形で厚味のある縦長の剝片で、背面左側縁下部に小剝離痕がみられる。下部は欠損している。
- 第1ブロックからは、10点の使用痕剝片が認められた。その内、縦長剝片が5点・不定形剝片が5点である。縦長剝片には、刃こぼれ状の剝離痕を持つものが多くみられ、いっぽう不定形剝片には、狭い範囲に小剝離痕のみられるものが大半を占めるという傾向がうかがえた。



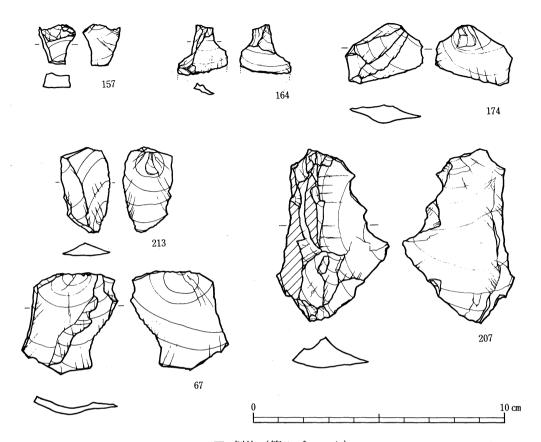
第15図 二次加工剝片・使用痕剝片 (第1ブロック)



第16図 調整剝片(第1ブロック)

調整剝片

- 183 打面調整剝片である。小形で比較的厚みがある。背面左側に一枚の大きな剝離痕が見られる。打面再生剝片とも考えられる。
- 156 厚みのある頭部調整剝片である。この剝片が剝取される前に数度の頭部調整のための剝離を行っている。
- 162 体部調整剝片である。背面はほとんど自然面で占められている。したがって、原礫から 石核を作出する際の最も初めの段階で剝離されたものと考えられる。打面は自然面ではなく、 3 枚の剝離によって形成されている。



第17図 剝片(第1ブロック)

166 縦長で,厚みのある体部調整剝片である。背面中央に大きな節理面を有し,その周辺の 剝離の方向は一定ではない。

147 体部調整剝片である。腹面の打瘤は下からの剝離で切られている。その剝離は、この剝片が剝取された際に出来たものと考えられる。この剝片も166と同様に、石核体部を整形するために剝取されたものと考えられる。

剝 片

- 157 背面側の左上部の剝離は、この剝片を剝離した際にできたものである。
- 164 腹面側の打瘤が剝離によって切られているのは、この剝片が剝離された際に同時に切られたものである。
 - 174 比較的大きな頭部調整剝離痕を有している。
- 213 背面側に下方向からの剝離を有する。なお、当遺跡第2地点出土の遺物で、背面側の剝離方向が腹面側のそれと異なるものは、顕著ではない。
 - 207 背面側の左側部に節理面を有するため、加撃による力が逃げて、中央部が厚くなったも

のである。不整形であることからも、調整剝片的性格を持つものである。

接合資料

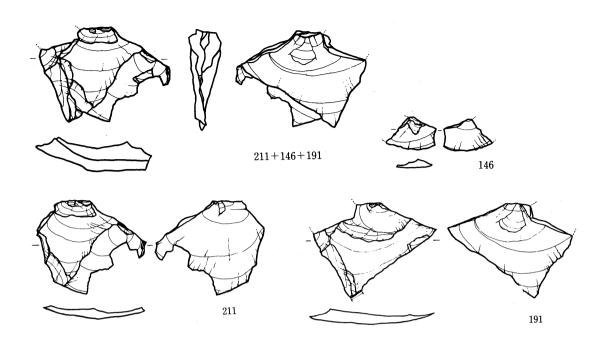
211+146+191 211の剝片と146の頭部調整剝片と191の使用痕剝片が接合したものである。 211は、下部を欠損している。頭部調整が施されている。146は、剝取された時は現在よりも一回り大きかったが、欠損により現在の形になったと考えられる。191は、右側下部に微細な剝離を有している。これらの剝片は、いずれも薄手である。打面は単剝離打面で、打点は左右に移動している。この剝片が取られた石核では、目的的剝片の頭部を薄くするため、稜上ではなく、平面部に頭部調整を施した上で、剝片を剝取したものと考えられる。

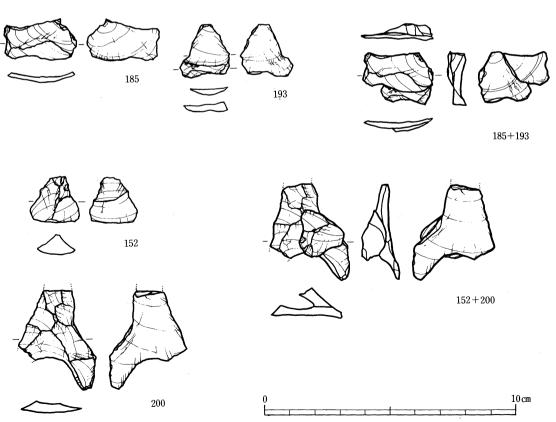
185+193 193は左側上部が欠損しており、剝取された時は現在よりも横長な剝片であったと考えられる。193の下端は、この剝片が剝取される前に剝離によって切られている。打点はほとんど一直線上に並んでいる。

152+200 不定形な体部調整剝片同士が接合したものである。もともと横断面のえぐれている所に存在した部分を剝取しようとしたのだが,はずみでそれとは別に152が同時に剝取されたものと考えられる。なぜならば、152の打面と打瘤は存在せず、上部の剝離痕と200の背面側の、接合面の左側の剝離痕が繋がるからである。152もヒンジフラクチャーによるものである。200は上部を欠損しているため、打面・打瘤は認められない。

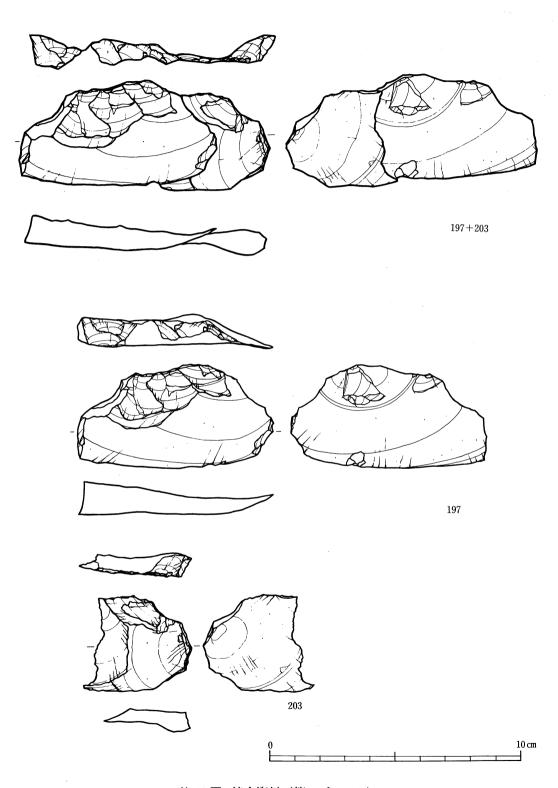
197+203 打面調整剝片同士が接合したものである。197は,目的的剝離痕を1枚と頭部調整痕を3枚持っている。背面の頭部に何度も加撃を加えられていることから,剝片を剝取する直前にも打面調整が行われていたと考えられる。この剝片自体は,203同樣,打面再生の目的で剝取されたものと考えられる。203は,目的的剝離痕を少なくとも1枚は持っている。打面右側の腹面側からの細かい剝離痕がみられる。197が剝取されたすぐ後に203も剝取されたと考えられる。打点は,ほぼ90°右に移動している。

210+28+209 210の二次加工剝片と28の体部調整剝片,209の使用痕剝片の3点が接合したものである。210は,大形で縦長の剝片で右下端部に,細かな剝離が連続した加工痕を有する。背面側は,薄い剝離痕が多く残っており,体部調整剝片と考えられる二次加工の剝片である。28は小形で厚みのある体部調整剝片である。209は,腹面右下部に刃こぼれ状の使用痕が認められる。打面,ならびに打瘤は,欠損により失われているが,上部よりも下部に行くに従って厚くなっている。下端部に自然面を有する。28の接合面より下部は,28の剝取後,何度も細かい剝離をくり返して厚みを減らそうとした部分と考えられる。

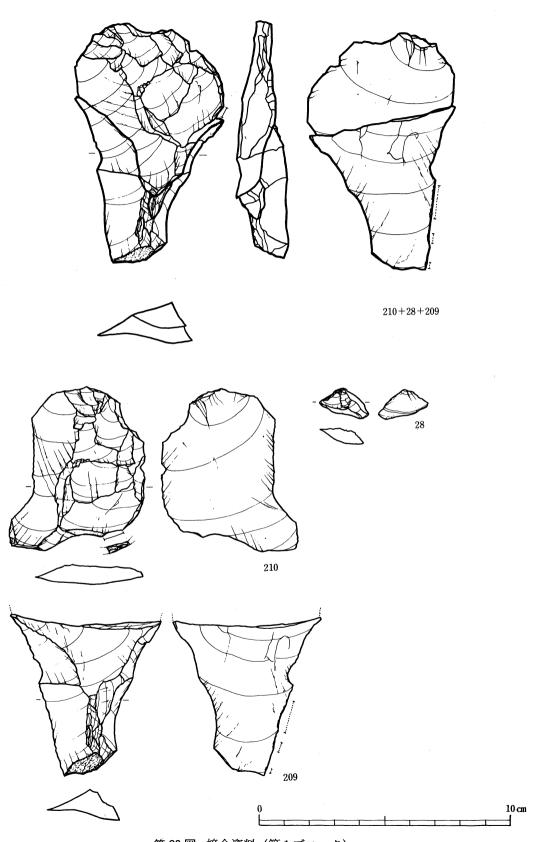




第18図 接合資料(第1ブロック) - 29 -



第19図 接合資料(第1ブロック)



第20図 接合資料 (第1ブロック)

2. 第2ブロックの石器群

ナイフ形石器

022 両設打面の石核より剝離された縦長剝片を素材とする二側縁加工のナイフ形石器である。素材の縁辺を片側に残し、対応する側縁を斜めに切る斜整形を呈する。右側縁と左側縁下部に対向する加工が入念に施されている。また左側縁上部から中部にかけてを刃部とし、刃こばれが見られる。断面は三角形を呈し、基部が最も厚くなっている。背面側は、加工を施している部分以外は1枚の剝離である。

127 欠損のため、詳細は不明であるが一側縁加工のナイフ形石器と考えられる。加工は腹面側からのものがほとんどであるが、背面側からのものも見られる。打面部(基部)の幅が狭く、 先端(末端)が広い縦長の湾曲した剝片を素材にしていると考えられる。

141 黒曜石製の一側縁加工のナイフ形石器である。石材は阿蘇を起源とする黒曜石と考えられ、比較的小形である。素材の打面・打点は加工のため消失している。加工は右側縁に施され、対向している。左側縁を刃部としている。断面は三角形を呈し、基部側が最も厚い。

31+125 縦長剝片を素材とする一側縁加工のものである。打面・打点・打瘤が見られ、素材の形状をほとんど残している。左側縁に腹面側からの加工が施され、右側縁を刃部としている。 断面は台形状を呈し、基部から先端部まで厚さは一定している。

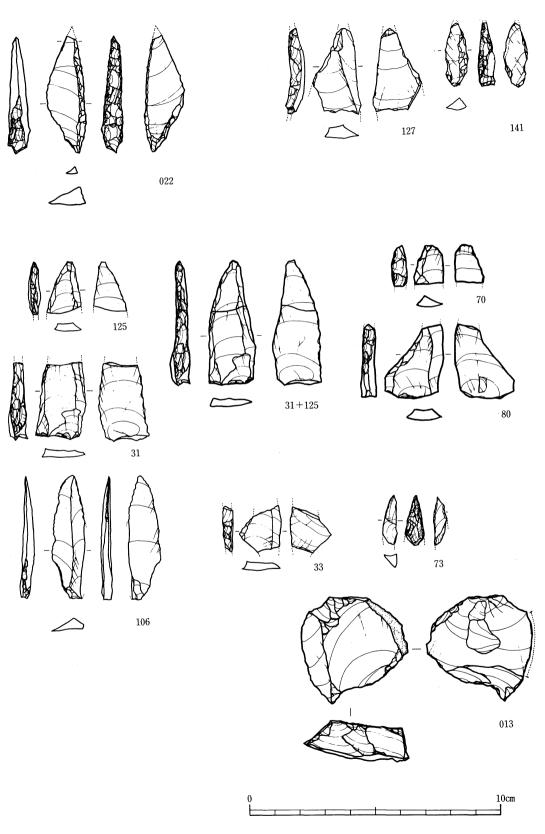
70 一側縁加工のナイフ形石器で先端部のみを残している。先端部は素材の剝片がヒンジフラクチャーのため、比較的厚みを持っている。左側縁に腹面側からの加工が施され、右側縁を刃部としている。このナイフ形石器は剝片027と接合する。また027はナイフ形石器の80とも接合する。なお70と80は直接接合しないが、本来は1つのナイフ形石器である。

80 一側縁加工のナイフ形石器である。先端部は欠損し、打面・打点が見られ素材の形状をほとんど残している。左側縁に腹面側から加工が施され、右側縁を刃部としている。断面は台形状を呈している。接合関係から、もともと70が先端部であり、70の欠損後、再加工を施している。現在見られる欠損は、欠損面の観察などから再加工中に欠損したものと考えられる。

106 縦長剝片を素材とし、部分加工が施されたナイフ形石器である。右側縁部は欠損している。素材の剝片は薄く柳葉状で、その形状をあまり変えず、左側縁基部と右側縁先端部に腹面側からの加工が施されている。また、基部には裏面加工が施されている。左側縁を刃部とし、刃こぼれが見られる。

33 上・下部は欠損しているため詳細は不明であるが、一側縁加工のものと考えられる。左側縁部に腹面側からの加工が施されている。断面は台形状を呈している。

73 先端部のみで大部分が欠損しているため詳細は不明である。対向した加工が左側縁へ緻密に施されている。先端は、鋭く尖っている。厚手のナイフ形石器であったと考えられる。

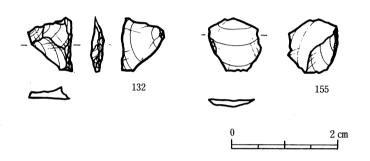


第 21 図 ナイフ形石器・スクレイパー(第 2 ブロック)

駒方古屋遺跡のナイフ形石器は、単設または両設打面の石核から剝離された縦長剝片を素材としている。このことは百枝遺跡第三文化層のものと類似する点がある。駒方では、百枝第三文化層に比べ一側縁加工のナイフ形石器が多く出土している。この中には打面を残すものがある。また、181は百枝第二・三文化層出土の尖頭器に類似している。159のナイフ形石器は、百枝第二・三文化層、岩戸遺跡第一文化層でも例がない。

スクレイパー

013 B類流紋岩で、全体的に厚みのある不定形剝片を素材とする。打面を有し、一部自然面を残す。素材の下部に背面から二次加工を施し、刃部を形成している。ノッチドスクレイパーとして理解される。



第22図 ブランティングチップ類 (第2ブロック)

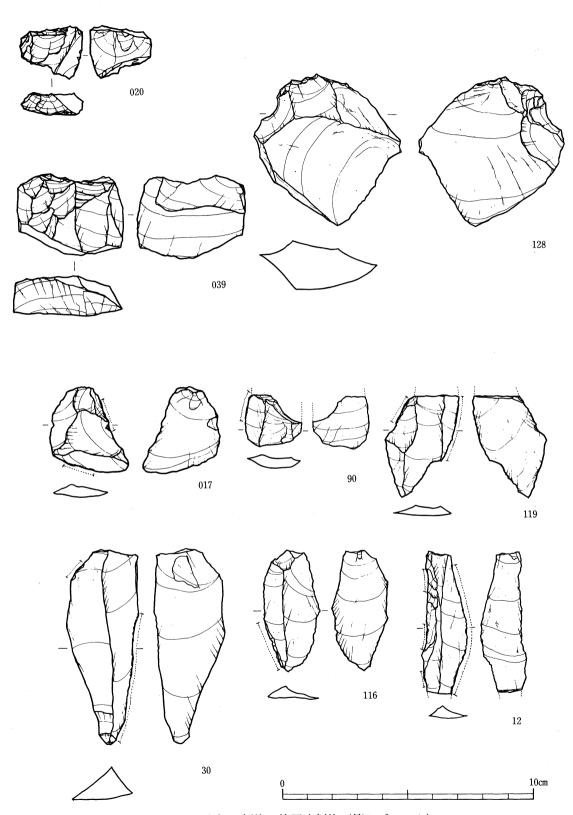
ブランティングチップ

ブランティングチップは、ナイフ形石器製作過程の際に生じた砕片と考えられるものである。 駒方古屋遺跡第1地点でも出土しており、その認定に際しては、第1次発掘調査報告の基準に 基づくものである。

132 打点を頂点とし、三角形を呈する。打点と対応する縁辺に旧ブランティング加工面を残している。

当遺跡の第1地点では、ブランティングチップと考えられるものが11点出土している。第2地点では、砕片そのものが少なく、その中でもブランティングチップと考えられるものは、この1点だけである。

155 ブランティングチップではないが、砕片に加工痕を有するものである。背面側の左側縁中部と腹面側の右側縁中部に微細な加工痕が見られる。打点は残っておらず、腹面側には2枚の剝離がある。なお、グラフや分布図においては砕片として扱っている。



第23図 二次加工剝片・使用痕剝片(第2ブロック)

二次加工剝片

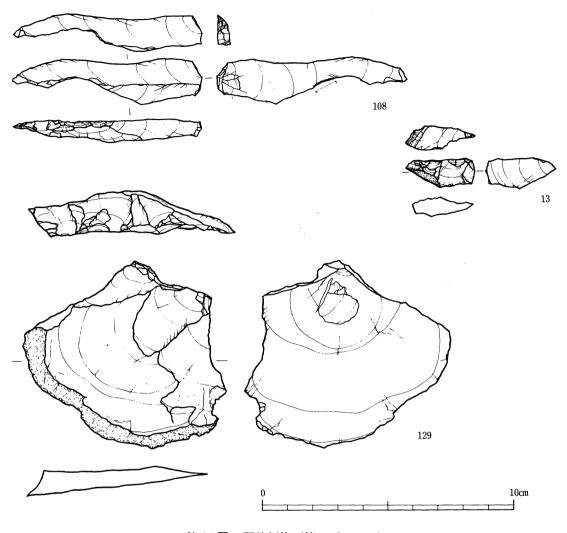
- 020 C類流紋岩で、縦長剝片の背面中央部から切断されたものと考えられる。切断面は、2 枚の大きな剝離痕と6枚の小さな剝離痕により形成されている。打面は、2枚の大きな剝離痕 により形成されている。頭部調整は施されていない。どの様な石器を作出するために切断され たかは、不明である。
- 039 B類流紋岩で、全体的に厚みのある縦長剝片を素材にしている。腹面上端部に1枚、背面に数枚の二次加工を施している。腹面からの加工により打面は切り取られている。下部は欠損している。背面左側部に自然面を残す。
- 128 C類流紋岩で、右側部が厚く左側部が薄い大形で不定形の剝片を素材とする。背面に 1 枚、腹面に 8 枚の上からの加工痕が見られる。打面と打瘤はこの加工によって、一部切り取られている。

第2ブロックの二次加剝片はC類流紋岩が多く用いられている。出土層は全てVII層である。 素材の大きさ・重さ・形状に統一性は見られない。

使用痕剝片

- 017 複剝離打面を持つやや薄手の縦長剝片で、背面の右側縁中部と下端部に小剝離痕がみられる。
- 90 小形で下部が厚味を持つ剝片で、背面左側縁上部に刃こぼれ状の剝離痕が認められる。 上部は欠損している。
- 119 上部の欠損した薄手の縦長剝片で、背面右側縁上部から中部と右側縁上部にかけて、刃こぼれ状の剝離痕がみられる。
- 30 全体的に厚味があり、下端部にかけて次第に幅が狭くなる縦長剝片の背面右側縁中部から下部にかけて刃こぼれ状の剝離痕がみられる。左側縁上部には、右側縁中部にみられるものよりもやや大きめの小剝離痕が認められる。
- 116 打面を有する縦長の剝片で、背面左側縁下部に小剝離痕がみられる。上部にかけて、やや厚くなっている。
- 12 薄手の縦長剝片で、背面左側縁上部・中部・下部にそれぞれ狭い範囲で小剝離痕がみられる。右側縁上部から下部にかけては、刃こぼれ状の剝離痕が認められる。

第2ブロックの使用痕剝片は10点である。その内、縦長剝片が8点、不定形剝片が2点認められた。また、第1ブロックの使用痕剝片は,C類流紋岩が10点の内8点を占めているのに対し、第2ブロックにおいては、A類2点・C類3点・D類2点・F類1点・G類2点といったように、石質に統一性がみられない。このことは第2ブロックの特徴の一つとして挙げられよう。



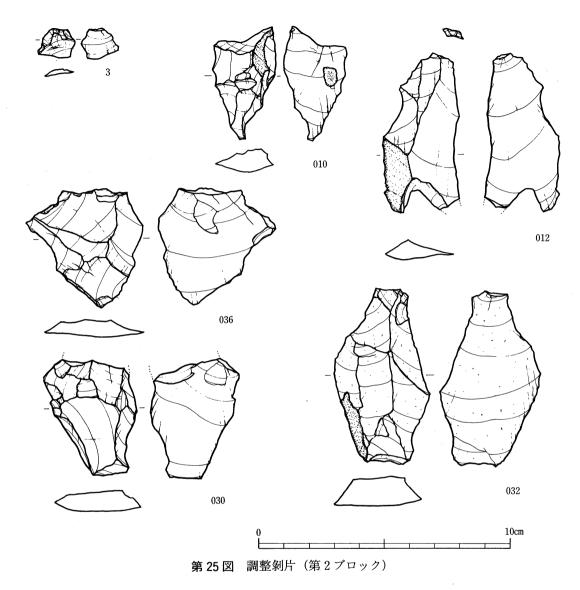
第24図 調整剝片 (第2ブロック)

調整剝片

108 横長で細い、打面調整剝片である。おそらく、打面再生のために剝取されたものと考えられる。背面右側部に大きな剝離痕を1枚と、小さな剝離痕を3枚有している。打面は、細かい剝離痕による複剝離打面である。腹面左側に刃こぼれ状の細かい剝離痕が認められる。使用痕と考えられる。

13 小形で厚みのある打面調整剝片である。背面左側部に剝離痕が1 枚残されており、その 剝離痕の左側部に頭部調整と思われる剝離が施されている。

129 打面調整剝片である。打面を輪切りにして、打面再生を計ったものと考えられる。目的的剝片を剝離したと考えられる剝離痕は、大きくて明らかなものが3枚と、その外にも2枚が認められる。13と同様に、下端部に自然面を有することから、当遺跡の石核調整は、体部調整



を全面にわたって行ってないようである。

- 3 頭部調整剝片である。小形で全体的に薄手である。頭部は約3 mmの厚さを持つ単剝離打面である。
- 010 体部調整剝片である。背面上部に自然面を有し、その周辺の剝離面の剝離方向は一定ではない。打面および打点を欠いているように見えるが、石材の持つ特性のため、打点が確認できないだけと考えられる。(E-7グリッド出土)
 - 012 縦長の体部調整剝片である。背面左側下部に自然面を有する。
 - 036 不定形な体部調整剝片である。背面の剝離痕の方向は一定ではない。
 - 030 体部調整剝片である。打面の右側をアクシデントにより欠損している。036と体部調整

剝片の形態が似ている。

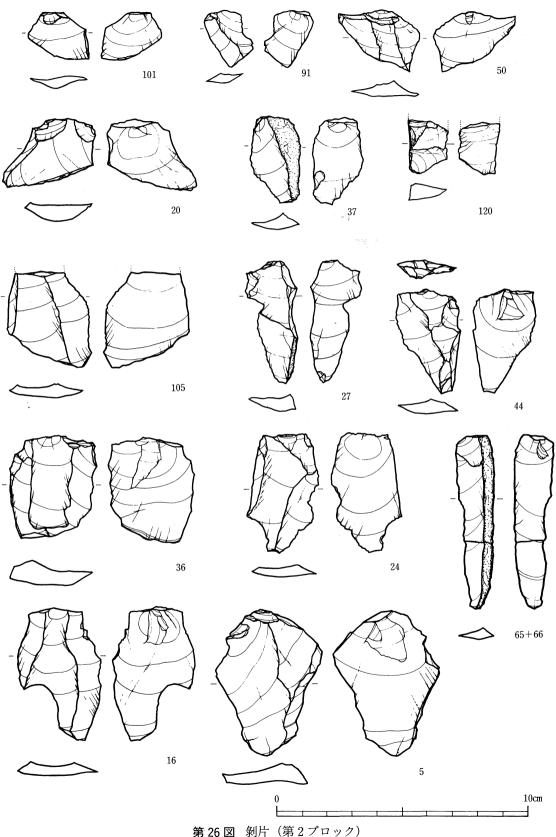
032 縦長で厚みのある体部調整剝片である。背面左側下部に自然面を有している。背面下部の剝離痕は風化が激しく、稜線が明確ではない。012と剝片の形態や調整がよく似ている。

剝 片

- ●101・91・50・20は横長な剝片で、いずれも「ノの字状」を呈している。打面は注記したもの以外は大きな複剝離によって形成されている。
 - 101 打面は単剝離打面である。
 - 50 顕著ではないが、頭部調整がわずかに施されている。打面は単剝離打面である。
- \bullet 37~5 は縦長の剝片である。打面は注記したもの以外は、大きな複剝離で形成されている。
- 120 背面側の比較的小さな剝離痕は、この剝片が剝離される前のものと考えられる。上部は欠損しているが、縦長剝片であったと考えられる。
 - 105 頭部を欠損している。薄手の剝片で、ヒンジフラクチャーによるものである。
 - 27 打面は単剝離打面である。頭部の細かい剝離は頭部調整とは考えにくい。
- 36 この剝片もヒンジフラクチャーによるものであり、背面中央の剝離痕もヒンジフラクチャーによるものである。
- 65+66 折損により、2地点から別々に出土したものである。折損は、アクシデントによる ものと考えられる。
- 5 下端部右側に自然面を有する。この剝片の左上部が最も薄く,他の部分は打瘤部も末端 部もほぼ同じ厚さである。打面は単剝離打面である。
- ullet 011+033 \sim 11はいずれも不定形な剝片である。打面は注記したもの以外は,大きな複剝離により形成されている。
- 011+033 折損により別々の地点から出土したものと考えられる。腹面右側の稜は、この剝片が剝離された時にできたものと考えられる。
 - 61 打面は単剝離打面である。
- 112 単剝離打面である。背面側の稜上ではなく、平担部分に頭部調整痕を有している。打面は単剝離打面である。
- 037 背面左側の稜は薄い剝離が取られたために不鮮明であると考えられる。打面は単剝離打面である。
 - 111 打面は単剝離打面である。
 - 11 大形で厚みのある剝片である。下端部に自然面を有する。

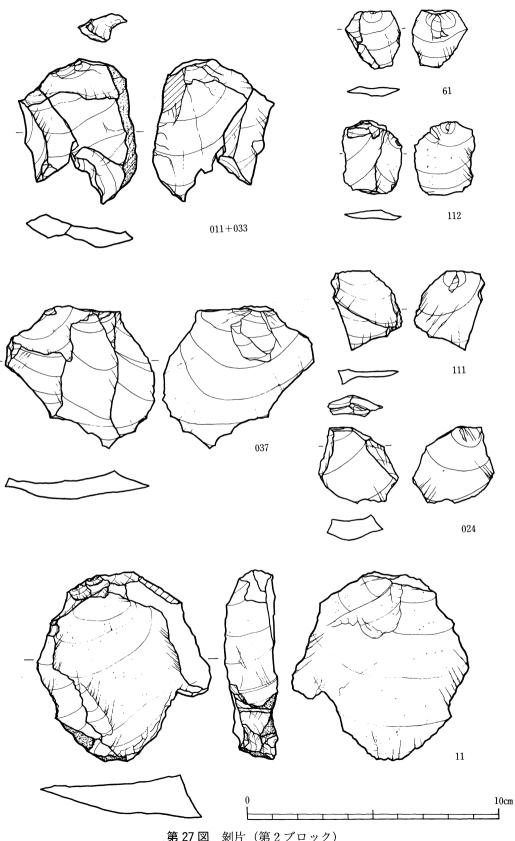
敲 石

014+019 拳よりもやや小さな円礫を用いている。礫面中央部から下部にかけて、敲打痕が 見られる。欠損は、敲打によるものと考えられる。

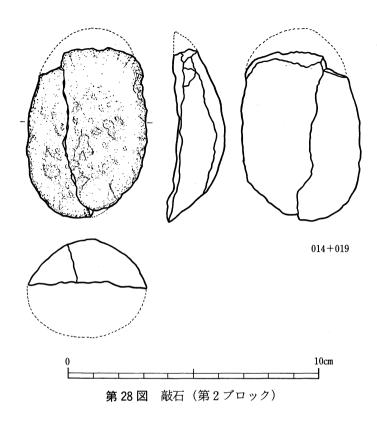


第26図 剝片(第2ブロック)

— 40 **—**



第 27 図 剝片(第 2 ブロック) — 41 —



接合資料

70+80+027 $70\cdot80$ のナイフ形石器と027の剝片が接合したものである。打面は比較的小さな剝離で覆われている。打点は約30°左に回転している。ナイフ形石器についての詳しい記述は、ナイフ形石器の項を参照されたい $(32^{\alpha}-i)$ 。

22+035 22の剝片と035の使用痕剝片が接合したものである。22は縦長で薄手の剝片である。打面は欠損している。035は比較的厚手の縦長剝片である。左下部に刃こぼれ状の使用痕を有する。22に打面が残っていないが、035のネガティブバルブの観察で打点は右にやや移動していることが認められる。035の打面右側には、この剝片がとられる直前に打面調整を行ったと思われる剝離痕を有する。

137+10 使用痕剝片同士が接合したものである。137は下部に2箇所の使用痕を有する。10は腹面頭部に使用痕を有する。両者の使用痕は,通常見られるような微細な剝離痕の連続ではなく,比較的大きな剝離痕が $2\sim5$ 枚程度連続したものである。137は,単剝離打面である。10は打面が一部欠損しているが,その遺存状況を考えた場合,137と同様に単剝離打面であったと考えられる。

15+26+79+43 79の使用痕剝片と43の剝片に2点の頭部調整剝片が接合したものである。15は、43の稜を削除するために剝取されたと考えられる。頭部調整剝片である26は15が剝取さ

れた際に出来た稜を削除するために新に剝取されたと考えられる。いずれの頭部調整剝片も細長いのが1つの特徴である。79は、背面左側縁の剝離痕に細かな6枚の剝離痕を有している。 二次加工と判断したが、使用痕の可能性も考えられる。43と79の打点を観察した結果、真左に移動している。

2+35+140+21+130+14+86 合計 7 点接合した接合資料で、剝片剝離技術を把握することが可能である。 $2+35\cdot21\cdot86$ は頭部調整剝片である。 $140\cdot130\cdot14$ は剝片である。7 点中 4 点が頭部調整剝片で,しかも各剝片の頭部調整が顕著であることがうかがえる。また、頭部調整についても、2+35や21のように比較的大きな剝片剝離で,稜を取り除く場合と,各剝片の頭部に残されているような、細かい剝離を稜のない平坦な部分に加えている場合とが認められる。打面は、 $140\cdot130\cdot14\cdot86$ で残っており、いずれも節理面を打面としている。打点は140を基準とした場合、130は約2.5cm左、14は約3 cm右というように左右に移動しながら剝片を剝取している。

68+18 剝片同士が接合したものである。18は背面に多方向からの剝離を持っている。体部調整剝片としての性格を持っていた可能性が考えられる。また,68は打面を残しているが,打点ははっきりしない。18も打面は明確だが打瘤がほとんど見られないことから,石材の性質上,打点が確認できないものと考えられる。

136+113 剝片同士の接合である。136は、ノの字状の形態を呈する縦長剝片であり、113は、 剝片の長さと幅の比がほぼ1:1に近い剝片である。両者とも薄手の剝片である。打面は単剝 離打面であるが、136の打点は、新しい剝離により失われている。

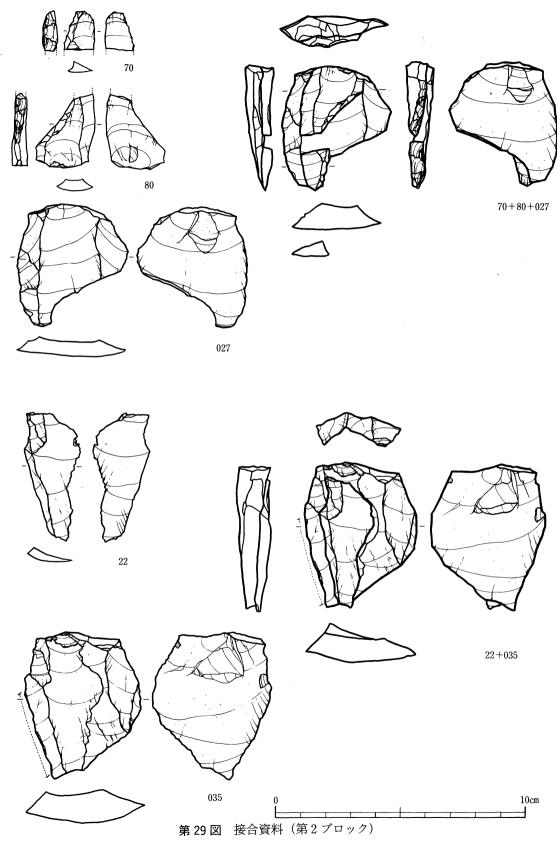
84+110+103 3点とも剝片である。いずれも背面左側に節理面を有する。84と110は元来1枚の剝片であったが、欠損のため別々の地点より出土したものと考えられる。84の打面は、この剝片が剝取される直前に小さな剝離痕によって調整が施されている。打点は84のものより、103のものの方が、右へ約7㎜移動している。

19+92 薄手の縦長剝片が2点接合しているものである。19は上部を欠損している。92は打面の右側を欠損している。

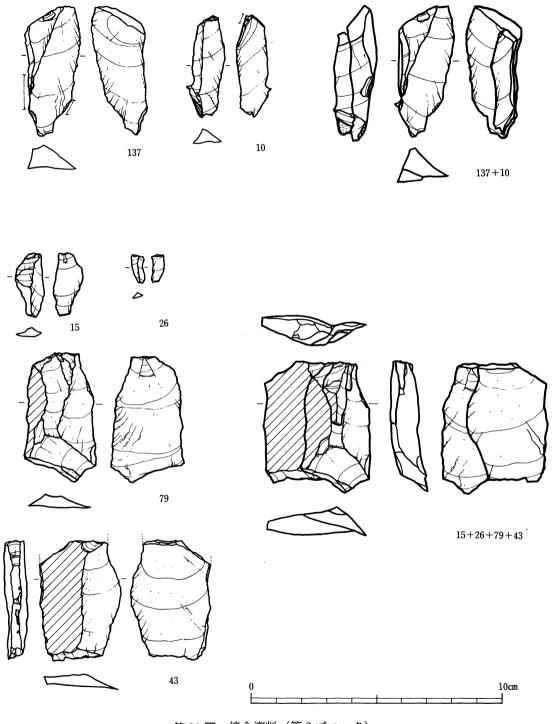
72+126+74 剝片が3点接合したものである。72は、中央部しか残存していない。74は下部を欠損している。74・126とも打面は単剝離打面で、126の打点よりも74の打点は左に約1cm、72の打点は74の打点よりも更に左に6 mm程移動していたものと考えられることから、打点は左方向にのみ移動している。

71+25 共に剝片である。25は頭部の厚さと下端部の厚さを比較した場合,下端部の方がやや薄くなる程度で,ほぼ同じ厚さを保っている。第32図68+18の石器同様,25・71とも打瘤が明確ではない。打面は両者とも単剝離打面である。打点は,25と71ともほぼ一直線上を後退している。

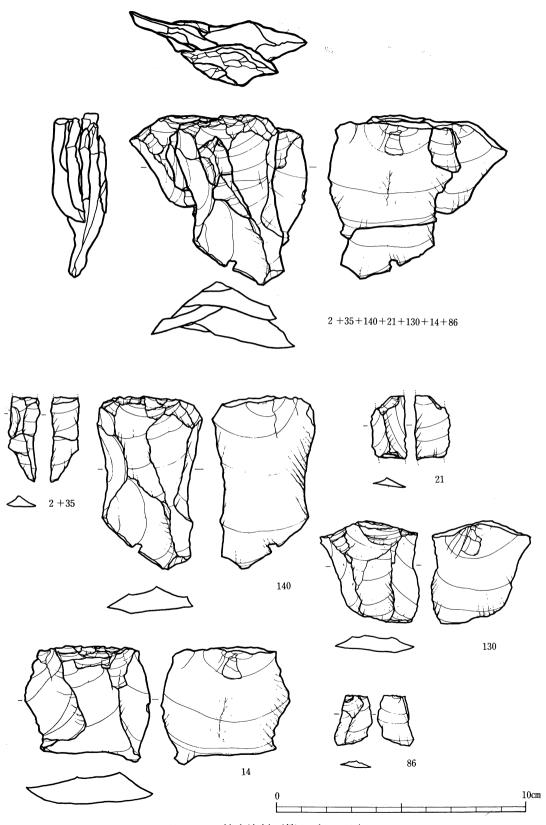
018+117+123+038 ほぼ角錐形をした石核に剝片 2 点と体部調整剝片 1 点が接合したものである。



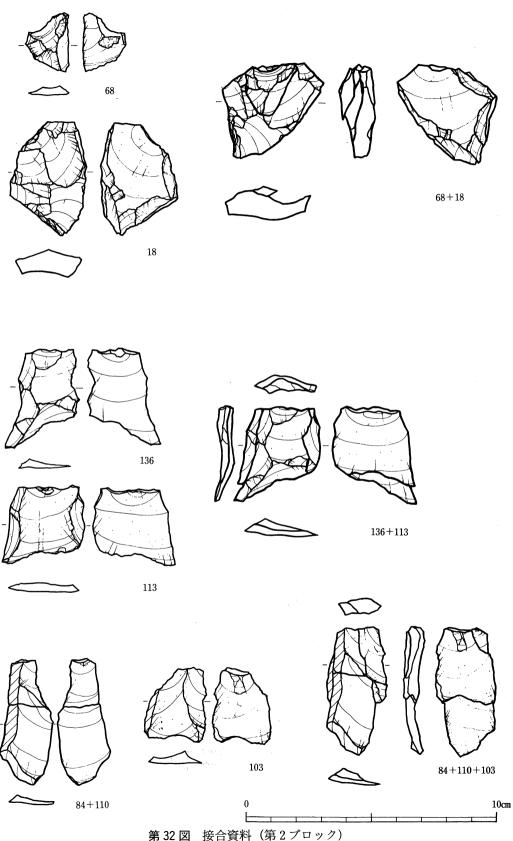
- 44 -



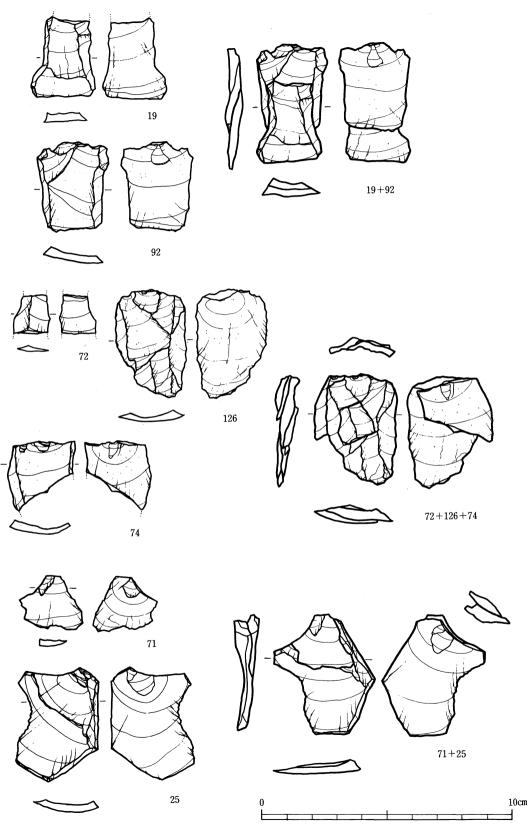
第30図 接合資料 (第2ブロック)



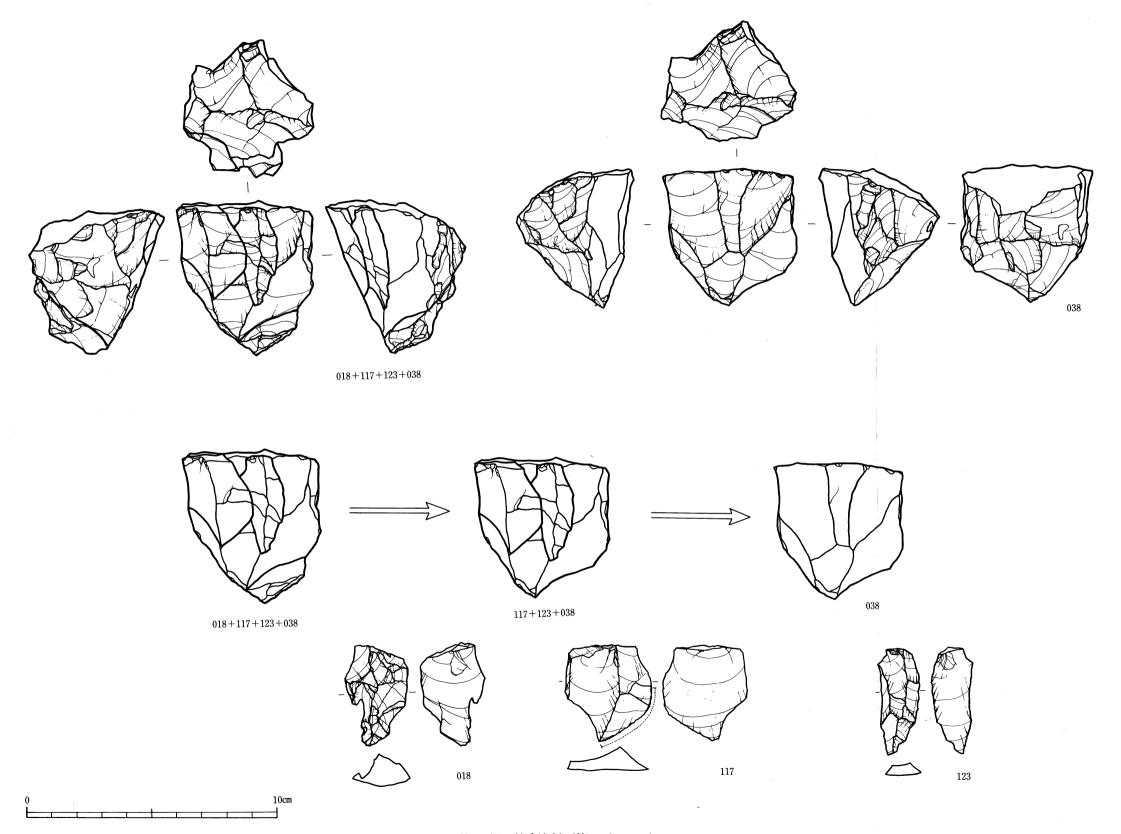
第31図 接合資料(第2ブロック)



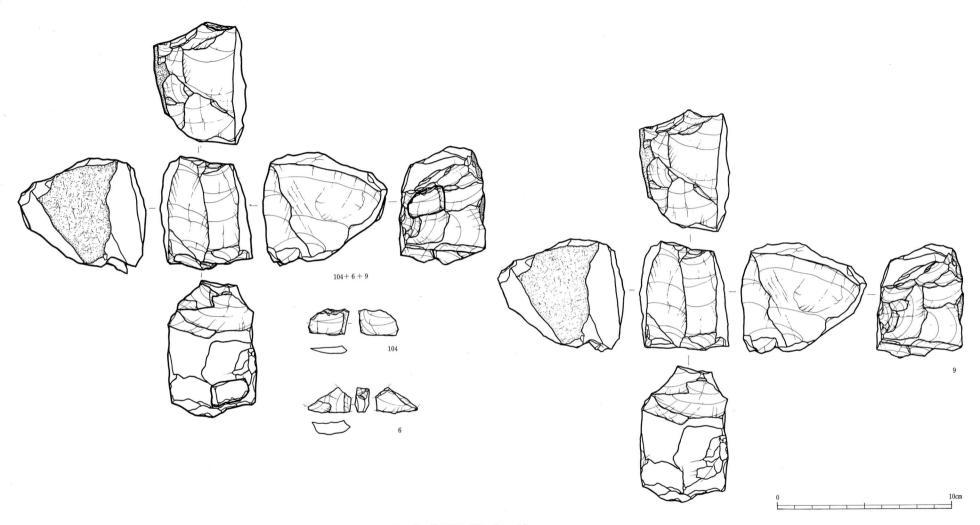
第32図 接合資料(第2ブロック)



第33図 接合資料 (第2ブロック)



第34図 接合資料(第2ブロック)



第35図 接合資料(第2ブロック)

038 正面観は五角形,側面観は三角形を呈する石核である。剝離作業面は正面のみである。 打面は4枚の大きな剝離痕と3枚の小さな剝離痕により形成されている。打面は剝離作業面側 から反対側へ向かって後退している。

018 038の石核の体部調整剝片で、接合した3点の中では最も早く剝取されたものである。 背面は体部調整のための比較的小さな剝離痕で履われている。

117 接合した3点の中では2番目に剝取された使用痕剝片である。右側縁下部に刃こぼれ 状の剝離痕による使用痕が見られる。

123 細身の縦長剝片である。この剝片は、直接石核に接合するのではなく、018の腹面に背面左側部の細長い剝離痕の部分が接合するものである。

石核体部ならびに117・123を観察すると、頭部調整は行われていない。また、剝片を剝離する直前に、細かい剝離によって行う打面調整も行われていない。石核の剝離作業面に残されている面の大きさ・形態などが類似していることから、159・181のようなナイフ形石器の素材剝片が剝取されたと考えられる。

104+6+9 不整形な石核に二次加工剝片と剝片が接合したものである。9の石核は,正面観は四角形,側面観は下辺の短い台形状を呈している。打面転移を頻繁に行っているので,打面と作業面をそれぞれ4面有している。各々の作業面から目的的剝片は1~2枚しか剝取されなかったと考えられる。頭部調整は行っていない。また,剝片剝取直前の打面調整も行っていない。6は,小形で横長な剝片である。打面,打点を欠いているが,これは,この剝片を剝取した際に同時に欠損したためと考えられる。104は腹面側からの二次加工により,打面・打点および打瘤が除かれている。下部の欠損は意図的なものではなく,何らかのアクシデントによるものと考えられる。9の石核は駒方古屋遺跡第1地点から出土した石核や第2地点から出土している038と比べて整った体部をしておらず,大きく自然面を残している。

駒方古屋遺跡第 2 地点では,黒色帯への漸移層(VII層)を主体に出土した石器群に対して,「駒方古屋第 2 文化層」として把握した。この第 2 文化層の石器群は大小 2 つのブロックに区分できると判断した。すなわち, $Q-12 \cdot 11$ グリッドを中心にした第 1 ブロックと, $R-8 \sim R-10$ グリットを中心にした第 2 ブロックである。

第1ブロックの石器組成は、ナイフ形石器 3 点をはじめ、使用痕剝片10点・二次加工剝片 3 点、それにスクレイパー1 点などの石器と、調整剝片11点を含む剝片41点、砕片 4 点からの都合60点からなっている。個体別資料では12の個体から構成されているが、そのうち個体別資料 $N_0.5$ が第1ブロックの約半数を占めている。

いっぽう,第 2 ブロックの石器組成ではナイフ形石器10点の多さが注目される。ほかの石器については,第 1 ブロックとほぼ同数で,使用痕剝片10点・二次加工剝片 4 点・スクレイパー 1 点,それに敲石 2 点(接合)である。剝片は調整剝片21点を含む133点,砕片14点,このほかに石核 2 点が出土している。特に個体別資料No.6 の30点において,すべての種類が見られる。

第2節 駒方古屋第1文化層

1. 第3ブロックの石器群

剝 片

047 流紋岩製の縦長の剝片である。単剝離打面を有する。背面側・腹面側ともに、フィッシャーが著しく残っている。

ブランク

052 剝片を素材としたブランクである。上部の裏面側からの3枚の剝離によって素材となった剝片の打面および打瘤を取り除いている。正面左側の剝離痕は、この素材となった剝片が 剝取される前に剝離されたものである。

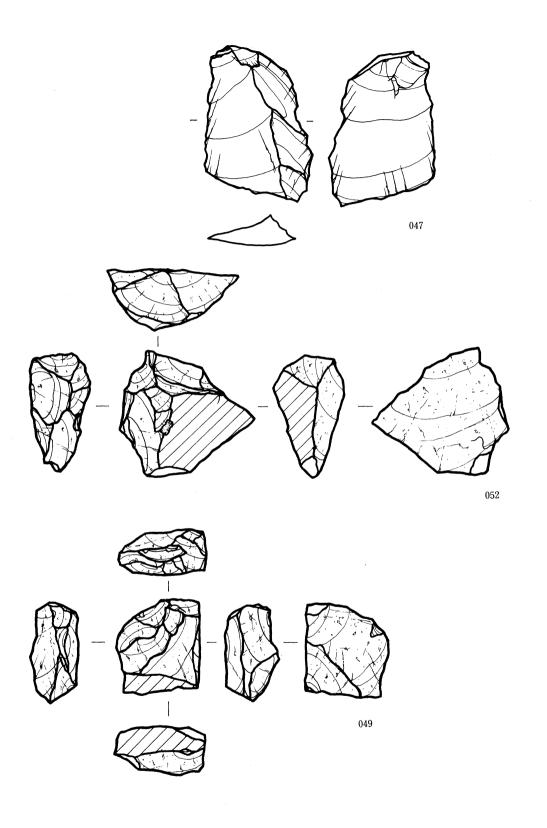
049 小形で剝片を素材としたブランクである。素材となった剝片の打面と打点を残している。打瘤は顕著ではない。素材となった剝片は、下部に節理面を有することから、横長の厚みのある剝片であったと考えられる。裏面上部からの1回の加撃により、素材剝片の右側を取り除いている。正面に残っている剝離痕のうち、このブランクの素材となった剝片が剝取された後に剝離されたものは1枚しかないことから、ある程度、ブランクとしての調整を行って、素材剝片が剝取されたと考えられる。その後もなおブランクとしての加工を施したものである。

052と049とも、ブランクとしての調整を顕著には受けていないままである。両者とも黒曜石であるが、節理の入り方や不純物の入り方などがきわめて似ているので、同一の原石から剝取されたものと考えられる。

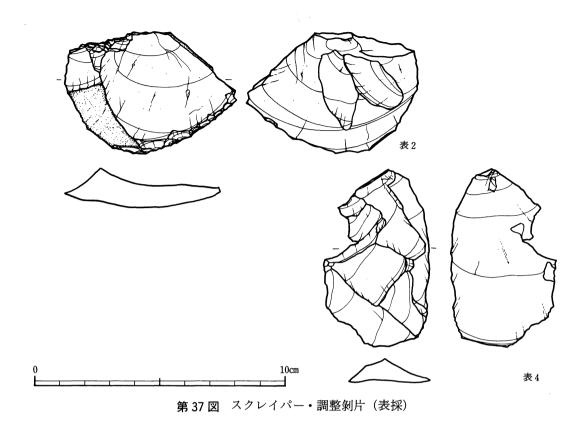
第2地点のU-7・T-7グリッドの第V層において集中的に出土した黒曜石製の石器群を「駒方古屋第1文化層」として把握した。これは、出土グリッドがU-7・T-7の狭い範囲に限られ、しかも出土層位が第2地点のほかグリッドの主要包含層と異なる。さらに、石材が流紋岩でなく黒曜石が用いられていることなどから、第1文化層第3ブロックとして区別した。37点からなるこの第3ブロックでは、定型的な石器はおろか、二次加工剝片・使用痕剝片な

57点からなるこの第5プロックでは、定型的な行品はあっか、二次加工約万・使用扱約万などの石器も、1点も出土してない。砕片19点・調整剝片2点を含む小さな剝片16点、それにブランクと考えられる2点だけである。

駒方古屋遺跡で第1文化層とした石器群については、典型的な石器を欠いているため、大野川流域での旧石器時代の位置づけは全く不明である。ただ、駒方遺跡、大野原台地および大野川流域の流紋岩製を主体とする旧石器時代の石器群の中にあって、石材の上できわめて特殊なあり方を示している。



り 5 cm 第 36 図 剝片・ブランク(第 3 ブロック) - 51 -



第3節 表面採集資料

スクレイパー

表 2 石材は流紋岩で、全体的に厚みのある横長剝片を素材とする。打面を有し、一部自然面を残す。末端部に規則正しく二次加工が施され刃部を形成する。上部は頭部調整と思われる痕跡を残す。典型的なサイドスクレイパーである。

調整剝片

表 4 体部調整剝片である。背面の剝離痕の打点方向は、すべてこの剝片の打面より約45°左へ傾いている。したがって、この剝片の打面より約45°左へ傾いた打面から剝片を剝取した後に、打面転移を行い、最初に剝取した縦長剝片である可能性が考えられる。

付1. 駒方古屋遺跡第2地点の剝片について

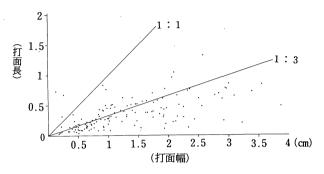
打面の長幅比

第38図は、打面の長さと幅(厚さ)を計測して、グラフ化したものである。対象とした遺物は、打面が確認できる147点である。このグラフから、当遺跡第2地点出土の遺物は、打面の長幅比が1:2より下におさまるという傾向がうかがえる。打面幅は1cm以下に集中しており、それ以上はだんだんとまばらになっている。長幅比の一番集中しているのは、1:3よりやや下の方である。

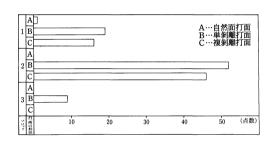
打面形状

第39図は打面形状を観察し、自然 面打面・単剝離打面・複剝離打面に 分けてグラフ化したものである。こ こでの自然面打面とは文字通り, 礫 面を打面とするものである。単剝離 打面とは、剝片の打面が1枚の剝離 痕で形成されているものである。複 剝離打面とは、剝片の打面が2枚以 上の剝離痕で形成されているもので ある。複剝離打面は2つに分けるこ とができる。1つは、2枚以上の大 きな剝離痕によって石核の打面が形 成されている場合であり,いっぽう, 剝片を剝取する直前に, 小さな加撃 を何度も加えて打面調整を行う場合 である。後者の調整打面は、10点前 後認められる。

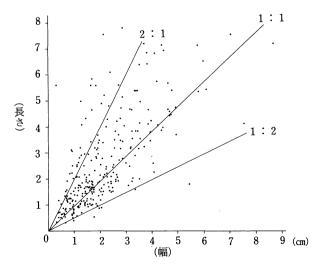
対象とした遺物は, 打面調整剝片



第38図 打面の長幅比ブラフ



第39図 ブロック別の打面形状グラフ

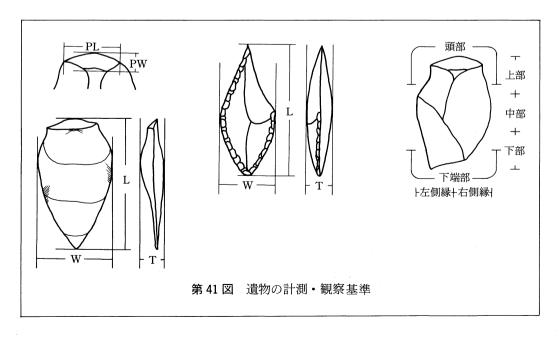


第40図 剝片の長幅比グラフ

以外で、しかも打面が確認できる146点である。自然面打面は1点のみである。第2・3ブロックともに、複剝離打面よりも単剝離打面の方が多いのが一つの特徴である。特に第3ブロックでは単剝離打面のみしか観察できない。

剝片長幅比

第40図は,遺物270点の長さと幅を計測し,その長幅比を表わしたものである。 $1:2\sim2:1$ の間に大部分の遺物がおさまる。長幅比の集中が1:1 よりも上に見られるので,当地点での剝片は,縦長剝片が主であると言える。しかし,長幅比が3:1 や2:1 のようなスマートな縦長剝片よりも,1:1 に近い,ずんぐりとした剝片が多いのが特徴である。



付2. 駒方古屋遺跡石器類観察上の規定

計測規準

計測にあたって、単位はcmを使用し、小数第2位まで求めた。

最大長(L):打面幅と腹面を水平にした時の最大長。

最大幅 (W):最大長に直交する最大幅。

最大厚(T):打瘤も含めた最大厚。

重量:単位はgを使用し、小数第2位まで求めた。

なお、打面の確認できないものについては、打点方向を真上に置いて行った。

打面の計測

打面長 (PL): 打面幅と直交する最大長。

打面幅 (PW):腹面と打面部を水平にした時の最大幅。

剝片の使用痕部位

使用痕が背面と腹面のどちら側に確認されるのかを明記し、計測の際と同様に剝片を置き、 上部・中部・下部で三等分し、左側縁・右側縁と部位を決定した。また、不定形剝片などについては、左側縁・右側縁の区別が難しい場合が生じるため、上辺から上部の中ほどまでを頭部、 下辺から下部の中ほどまでを下端部とした。

剝片の欠損部位

常に背面から観察し、残存の程度にかかわらず、上部が残存していれば下部欠損、中部であれば上部下部欠損、下部であれば上部欠損とし、左側部が残存していれば右側部欠損、右側部であれば左側部欠損とした。残存状態によっては、左側上部・右側下部などの表現も用いた。

個体別資料の分類

個体別資料の外観的特徴の項を参照 (16ページ)。

石質細分

石質細分とは、石器群を個体別資料化する一手段として行ったものである。なお、番号の異なるものは、個体別資料において別個体ということになる。

実測図での表現方法

実測図における表現方法においては、全ての実測図に共通する表現方法として、使用痕の部分は破線、二次加工の部分は実線、節理面には斜線を施した。

付3. 石器類個別観察表

No.	器 種	Grid	海抜(m)	層位	石 材	石質細分	個体別 番 号	接	合	最大長(L) (cm)	最大幅(W) (cm)	最大厚(T) (cm)	重量(g)	使用痕の部位	欠拍	員 部	位	ブロック	図 版
01	礫	E-1	238.694	Ιc	安山岩								138.50						
02	砕片	E-7	238.273	III	流紋岩					2.00	0.73	0.60	0.68						
03	剝片	E-7	238.109	III	流紋岩					1.37	2.04	0.39	0.93						
04	礫	E — 7	238.213	III	安山岩								118.20						
05	礫	E-7	238.146	III	不 明								87.50						
06	礫	E-7	238.129	III	安山岩								7.35						
07	礫	E-7	238.102	III	安山岩								17.00						
08	礫	E-7	238.214	III	不 明								39.83						
09	礫	E-7	238.209	III	安山岩								198.00						
010	体部調整剝片	E — 7	238.017	V	流紋岩					4.48	2.42	0.97	6.38						第25図
011	剝片	Q-10	238.395	V	流紋岩	Сз	6	033		5.61	0.34	0.97	19.37		下 部			2	第27図
012	体部調整剝片	Q-10	238.167	IV	流紋岩	A2	2			6.40	3.86	0.77	13.33					2	第25図
013	スクレイパー	Q-10	237.809	VII	流紋岩	B ₁	3			4.09	4.25	1.23	26.95					2	第21図
014	敲 石	Q-10	237.849	VII	安山岩	Ιı	26	019		6.13	2.45	1.11	23.10	中部、下部	上 部			2	第28図
015	砕片	Q-10	237.821	VII	黒曜石	H_1	24			0.52	0.95	0.50	0.23					2	
016	剝片	Q-10	237.833	VII	流紋岩	Сз	6			1.57	0.74	0.20	0.28					2	
017	使用痕剝片	Q-10	237.816	VII	流紋岩	D_3	12			3.61	2.93	0.55	4.67	背面右側縁中部 背面下端部				2	第23図
018	体部調整剝片	Q-10	237.786	VII	流紋岩	Сз	6	038、11 117、12		3.85	2.59	1.22	8.85					2	第34図
019	敲 石	Q-10	237.782	VII	安山岩	I 1	26	014		6.40	3.52	1.93	46.60	中部、下部	上部			2	第28図
020	切断剝片	Q-10	237.825	VII	流紋岩	C ₃	6			2.08	2.43	0.77	4.30					2	第23図
021	欠 番																		
022	ナイフ形石器	R-10	238.210	IV	流紋岩	G₃	19			4.67	1.67	0.83	4.50	刃 部	先端部			2	第21図
023	剝片	R-10	238.158	IV	流紋岩	A ₁	1			3.07	0.93	0.30	0.86					2	
024	剝片	R-10	238.187	IV	流紋岩	C ₃	6			2.92	3.36	0.77	6.77					2	第27図
025	剝片	R-10	238.192	IV	流紋岩	D_1	10			1.24	0.72	0.23	0.18		下 部			2	第29図
026	剝片	R-10	238.039	IV	流紋岩	Сз	6			1.21	1.77	0.25	0.40					2	
027	剝片	R-10	238.072	IV	流紋岩	F ₃	16	70,80		4.46	4.68	0.69	11.05		下 部			2	第29図
028	砕片	R-10	238.092	IV	黒曜石	H_1	24			0.66	0.62	0.19	0.10					2	

No.	器	種	Grid	海抜(m)	層位	石 材	石質細分	個体別 番 号	接合	最大長(L) (cm)	最大幅(W) (cm)	最大厚(T) (cm)	重量(g)	使用痕の部位	欠 損 部 位	プロック	図版
029	砕	片	R-10	238.075	IV	黒曜石	H ₁	24		0.34	0.33	0.06	0.01			2	
030	体部調	整剝片	R-10	237.990	V	流紋岩	F ₃	16		4.96	3.21	0.87	14.56		上部	2	第25図
031	剝	片	R-10	238.018	V	流紋岩	Сз	6		2.95	1.55	0.38	1.75			2	
032	体部調	整剝片	R-10	237.943	VII	流紋岩	Fз	16		6.87	3.77	1.12	25.77			2	第25図
033	剝	片	R-10	237.948	VII	流紋岩	Сз	6	011	3.52	2.54	0.82	6.21		左側部	2	第27図
034	剝	片	R-10	237.971	VII	流紋岩	Сз	6		3.42	2.86	0.92	5.05			2	
035	使用犯	复剝片	R-10	237.979	VII	流紋岩	F ₁	14	22	5.65	4.62	1.20	33.16	背面左側縁下部	下 部	2	第29図
036	体部調	整剝片	R-10	237.851	VIII	流紋岩	Fз	16		4.67	4.63	0.73	13.76		左側上部	2	第25図
037	剝	片	R-10	237.861	VII	流紋岩	B ₁	3		5.44	6.09	0.82	25.22			2	
038	石	核	R-10	(上)237.812 (下)237.749	VIII	流紋岩	Сз	6	018、114 117、123	5.41	5.02	4.32	116.8			2	第34図
039	二次加	工剝片	R-10	237.831	VII	流紋岩	B ₁	3		3.24	4.08	1.45	25.07			2	第23図
040	砕	片	T-7	238, 545	III	黒曜石	H ₁	24		1.53	0.68	0.62	0.35			3	
041	体部調	整剝片	T-7	238.390	III	黒曜石	H ₁	24		1.60	1.75	0.93	1.67			3	
042	砕	片	T - 7	238.342	V	黒曜石	H ₁	24	·	1.14	1.05	0.32	0.15			3	
043	剝	片	T - 7	238.131	V	黒曜石	H ₁	24		2.04	3.26	0.48	3.01			3	
044	剝	片	T - 7	238.090	V	黒曜石	H ₁	24		0.90	2.03	0.32	0.45			3	
045	砕	片	T - 7	238.083	V	黒曜石	H ₁	24		0.37	0.67	0.13	0.05			3	
046	剝	片	T-7	238.101	V	黒曜石	H ₂	25		1.96	2.56	0.62	2.75			3	
047	剝	片	T - 7	238.040	V	流紋岩	Вı	3		3.88	3.20	0.75	8.27			3	第36図
048	剝	片	T - 7	238.010	V	黒曜石	H ₁	24		1.88	1.70	0.28	0.42			3	
049	ブラ	ンク	T - 7	238.128	V	黒曜石	H ₁	24		2.14	2.16	1.61	6.62			3	第36図
050	剝	片	T - 7	238.115	V	黒曜石	H ₁	24		0.96	1.41	0.49	0.53			3	
051	砕	片	T - 7	237.969	V	黒曜石	H ₁	24		0.72	0.98	0.15	0.03			3	
052	ブラ	ンク	T - 7	238.044	V	黒曜石	H ₁	24		3.30	3.54	1.51	12.73			3	第36図
053	砕	片	T-7	238.000	V	黒曜石	H ₁	24		1.24	0.83	0.30	0.36			3	
054	剝	片	T - 7	237.979	V	黒曜石	H ₁	24		1.51	1.74	0.32	0.80			3	
055	剝	片	U-7	238.136	V	黒曜石	H 1	2,4		1.86	1.52	0.26	0.83			3	
056	砕	片	U-7	238.052	V	黒曜石	H ₁	24		0.66	0.97	0.23	0.23		上部、下部	3	
057	砕	片	U-7	238.063	V	黒曜石	H ₁	24		0.85	0.67	0.24	0.10			3	
058	欠	番															
059	砕	片	U-7	238.079	V	黒曜石	H ₁	24		0.74	0.48	0.29	0.03		l	3	

No.	器	種	Grid	海抜(m)	層位	石 材	石質細分	個体別 番 号	接	合	最大長(L) (cm)	最大幅(W) (cm)	最大厚(T) (cm)	重量(g)	使用痕の部位	欠 損 部 位	プロック	図版
060	体部調整	隆剝片	U — 7	238.079	V	黒曜石	H ₁	24			2.07	2.64	0.49	2.85			3	
061	剝	片	U — 7	238.093	V	黒曜石	H ₁	24			1.52	2.11	0.42	1.15			3	
062	砕	片	U — 7	238.063	V	黒曜石	H ₁	24			0.52	0.40	0.12	0.07			3	
063	砕	片	U — 7	238.042	V	黒曜石	H 1	24			0.58	1.10	0.14	0.05			3	
064	剝	片	U — 7	237.922	V	黒曜石	H ₁	24			1.67	1.65	0.45	1.13			3	
065	剝	片	U — 7	238.240	V	流紋岩	Сз	6			2.55	1.12	0.35	0.83			3	
066	砕	片	U — 7	238.180	V	黒曜石	H 1	24			0.70	0.40	0.12	0.07			3	
067	砕	片	U — 7	238.050	V	黒曜石	H ₁	24			1.18	0.40	0.16	0.10			3	
068	砕	片	U-7	238.060	V	黒曜石	H ₁	24			0.50	0.53	0.18	0.05			3	
069	砕	片	U — 7	238.070	V	黒曜石	Нı	24			0.83	0.94	0.30	0.15			3	
070	砕	片	U — 7	238.180	V	黒曜石	H ₁	24			0.93	0.94	0.13	0.08			3	
071	砕	片	U - 7	238.040	V	黒曜石	H 1	24			0.65	0.54	0.10	0.04			3	
072	砕	片	U — 7	238.020	V	黒曜石	H 1	24			0.61	0.92	0.11	0.05			3	
073	砕	片	U — 7	238.000	V	黒曜石	H ₁	24			0.87	0.59	0.10	0.05			3	
074	剝	片	U - 7	238.020	V	黒曜石	H ₁	24			1.87	1.91	0.41	0.55			3	
075	欠	番																
076	剝	片	U — 7	238.000	V	黒曜石	H ₁	24			1.67	1.68	0.55	1.50			3	
077	剝	片	U - 7	237.950	V	黒曜石	H 1	24			1.05	1.23	0.42	0.28			3	
078	砕	片	U — 7	237.940	V	黒曜石	H 1	24			0.91	0.46	0.18	0.07			3	
								,										
表1	扁平打	製石斧	表採			安山岩					12.90	5.70	1.87	141.8				. 1
表2	スクレー	イパー	表採			流紋岩					5.03	6.95	1.44	49.50				第37図
表3	剝	片	表採			黒曜石					3.41	3.23	1.35	14.48				
1	剝	片	R — 7	238.564	IV	黒曜石	H ₁	24			1.57	1.60	0.53	1.43			2	
2	頭部調	整剝片	R — 7	238.178	V	流紋岩	D_1	10	14,21,3 86,130,	35、 140	1.69	1.15	0.37	0.85		上部、下部	2	
3	頭部調整	整剝片	R — 7	238.180	V	流紋岩	Сз	6			1.15	1.48	0.41	0.35			2	第25図
4	剝	片	R — 7	237.959	VII	流紋岩	Сз	6			1.45	1.32	1.22	0.80			2	
5	剝	片	Q - 8	238.388	V	流紋岩	A 1	1			5.76	4.19	0.66	26.70			2	第26図
6	剝	片	Q-8	238.259	VII	流紋岩	F 1	14	9,104		1.49	2.40	0.80	3.00		左側部、右側部	2	第35図
7	剝	片	Q-8	238.224	V	流紋岩	F ₁	14			1.17	0.72	0.25	0.20		上部、下部	2	

No.	器	種	Grid	海抜(m)	層位	石 材	石質細分	個体別 番 号	接合	最大長(L) (cm)	最大幅(w) (cm)	最大厚(T) (cm)	重量(g)	使用痕の部位	欠 損 部 位	ブロック	図 版
8	剝	片	Q — 8	238.255	V	流紋岩	不明	不明		1.25	0.87	0.11	0.18		左側部、右側部	2	
9	石	核	Q-8	(上)238.192 (下)238.144	VII	流紋岩	F ₁	14		7.15	7.12	5.01	301.50			2	第35図
10	使用犯	良剝片	Q - 8	238.199	VII	流紋岩	A1	1	137	4.10	1.28	0.60	3.03	腹面左側縁上部		2	第30図
11	剝	片	Q-8	238.176	VII	流紋岩	A ₂	2		7.56	7.02	1.70	90.71			2	第27図
12	使用犯	良剝片	Q-8	238.073	VII	流紋岩	C ₄	7		5.60	1.64	0.50	4.21	背面右側縁中部~下部 背面左側縁上部	下部	2	第23図
13	打面調	整剝片	Q-8	238.093	VII	流紋岩	C 1	4		2.77	2.86	0.96	2.07		下部	2	第24図
14	剝	片	Q-8	238.084	VII	流紋岩	D_1	10	2,21,35, 27,130,140	4.73	4.91	1.18	37.50			2	第31図
15	頭部調	整剝片	R — 8	238.375	IV	流紋岩	D_1	10	26, 43, 79	2.49	1.09	0.28	0.67		下部	2	第30図
16	剝	片	R-8	238.421	IV	流紋岩	A 1	1		5.41	3.33	0.83	9.85		左側下部	2	第26図
17	剝	片	R — 8	238.337	ÍV	流紋岩	Сз	6		2.72	1.64	0.29	1.20			2	
18	体部調	整剝片	R — 8	238.363	IV	流紋岩	F ₂	15	68	3.81	3.93	0.95	14.10			2	第32図
19	剝	片	R-8	238.338	IV	流紋岩	F ₂	15	92	3.20	2.53	0.30	3.15		上 部	2	第33図
20	剝	片	R-8	238.315	IV	流紋岩	A 1	1		3.16	3.49	0.65	5.57		下 部	2	第26図
21	頭部調	整剝片	R — 8	238.293	V	流紋岩	D_1	10	2,14,35, 86,130,140	2.52	1.37	0.31	1.15		上部、下部	2	第31図
22	剝	片	R — 8	238.207	V	流紋岩	F ₁	14	035	5.22	2.15	0.36	3.31			2	第29図
23	剝	片	R — 8	238.231	V	流紋岩	D_1	10		1.35	0.65	0.14	0.85		下 部	2	
24	剝	片	R — 8	238.244	V	流紋岩	D_2	11		4.73	2.80	0.41	5.25			2	第26図
25	剝	片	R – 8	238.241	V	流紋岩	F ₂	15	71	4.66	3.84	0.54	7.46		上部、右側下部	2	第33図
26	頭部調	整剝片	R — 8	238.167	V	流紋岩	D 1	10	15,43,79	1.04	0.48	0.28	0.08			2	第30図
27	剝	片	R — 8	238.154	V	流紋岩	F ₂	15		4.90	2.03	0.57	4.42			2	第26図
28	体部調	整剝片	R – 8	238.242	V	流紋岩	C 2	5	209,210	1.17	2.00	0.44	0.71			2	第20図
29	剝	片	R — 8	238.198	V	流紋岩	D_1	10		2.16	1.31	0.35	0.82			2	
30	使用犯	良剝 片	R-8	238.216	V	流紋岩	C 1	4		7.81	2.86	1.01	24.35	背面右側縁中部~下部 背面左側縁上部		2	第23図
31	ナイフ	形石器	R-8	238.148	V	流紋岩	A ₁	1	125	3.12	0.87	0.64	4.40		上 部	2	第21図
32	剝	片	R — 8	238.180	V	流紋岩	F ₃	16		0.89	1.17	0.22	0.20			2	
33	剝	片	R — 8	238.207	V	流紋岩	F ₃	16		1.67	1.15	0.42	0.87			2	第21図
34	剝	片	R – 8	238.210	V	流紋岩	. F ₃	16		0.98	1.99	0.98	0.42		下 部	2	
35	頭部調	整剝片	R – 8	238.186	V	流紋岩	D ₁	10	2,14,21, 86,130,140	2.01	1.07	0.27	0.47		上 部	2	第31図
36	剝	片	R — 8	238.143	VII	流紋岩	F ₁	14		4.15	3.52	0.73	14.50			2	第26図
37	剝	片	R — 8	238.145	VII	流紋岩	A_1	1		3.50	1.96	0.64	3.50		下 部	2	第26図
38	剝	片	R — 8	238.093	VII	流紋岩	F ₃	16		1.84	1.30	0.08	0.32			2	

No.	器	種	Grid	海抜(m)	層位	石 材	石質細分	個体別 番 号	接	合	最大長(L)	最大幅(W) (cm)	最大厚(T)	重量(g)	使用痕の部位	欠 損	部 位	ブロック	図 版
39	剝	片	R – 8	238.076	VII	流紋岩	D_1	10			1.24	1.47	0.51	0.75				2	
40	剝	片	R — 8	238.043	VII	流紋岩	F ₁	14			1.14	0.91	0.41	0.43				2	
41	剝	片	R – 8	238.108	VII	流紋岩	F ₁	14			1.54	2.35	0.34	0.80				2	
42	剝	片	R-8	238.057	VII	流紋岩	F ₁	14			1.67	1.71	0.15	0.47				2	
43	剝	片	R — 8	238.006	VII	流紋岩	D_1	10	15,26,	79	5.13	2.85	0.57	8.33				2	第30図
44	剝	片	R — 8	238.081	VII	流紋岩	D_1	10			4.02	2.54	0.57	5.80				2	第26図
45	剝	片	R-8	238.098	VII	流紋岩	D_1	10			0.88	1.69	0.20	0.31		下 部		2	
46	砕	片	R – 8	238.053	VII	流紋岩	D ₁	10			0.85	0.96	0.15	0.12				2	
47	剝	片	R-8	238.066	VII	流紋岩	D ₁	10			1.35	0.72	0.17	0.43		上部		2	
48	剝	片	R-8	238.050	VII	流紋岩	F ₁	14			1.75	1.20	0.45	1.35				2	
49	剝	片	R — 8	238.047	VII	流紋岩	F ₃	16			0.75	1.15	0.16	0.23				2	
50	剝	片	R — 8	238.064	VII	流紋岩	D_1	10			2.01	3.52	0.44	2.88				2	第26図
51	剝	片	R — 8	238.072	VII	流紋岩	Сз	6			1.17	0.93	0.18	0.20		右側部		2	
52	砕	片	R — 8	238.040	VII	流紋岩	F ₁	14			0.63	0.91	0.10	0.06				2	
53	剝	片	R — 8	238.022	VII	流紋岩	\mathbf{F}_1	14			0.71	1.28	0.30	0.16				2	
54	剝	片	R — 8	238.020	VII	流紋岩	C 2	5			0.92	1.13	0.25	0.27				2	
55	砕	片	R — 8	238.040	VII	流紋岩	\mathbf{F}_{1}	14			0.82	0.66	0.15	0.13				2	
56	砕	片	R — 8	238.025	VII	流紋岩	D_1	10			0.93	1.14	0.12	0.13				2	
57	剝	片	R — 8	238.012	VII	流紋岩	F 1	14			3.13	1.86	0.29	1.93				2	
58	剝	片	R — 8	238.047	VII	流紋岩	D_1	10			1.30	0.66	0.12	0.13				2	
59	剝	片	R — 8	238.127	VII	流紋岩	F ₁	14			1.84	2.30	0.35	1.40		下 部		2	
60	剝	片	R — 8	238.050	VII	流紋岩	F ₁	14			1.36	1.10	0.23	0.17				2	
61	剝	片	R — 8	237.961	VIII	流紋岩	F ₁	14			2.37	2.22	0.31	1.71				2	第27図
62	剝	片	R – 8	237.989	VII	流紋岩	F 1	14			1.63	1.64	0.27	0.72		下部		2	
63	剝	片	R — 8	237.978	VII	流紋岩	D ₁	10			5.85	1.68	0.44	4.65				2	
64	剝	片	R — 8	237.990	VII	流紋岩	F ₁	14			2.24	0.90	0.37	0.47				2	
65	剝	片	R — 8	237.998	VII	流紋岩	A 1	1	66		4.34	1.43	0.50	3.31		下 部		2	第26図
66	剝	片	R — 8	237.967	VII	流紋岩	A 1	1	65		2.63	1.14	0.36	1.00		上部		2	第26図
67	剝	片	R — 8	237.948	VII	流紋岩	C 2	5			3.96	3.96	0.30	4.87				2	第17図
68	体部調	郡整剝片	R — 8	237.960	VII	流紋岩	F ₂	15	18		2.08	2.11	0.50	1.60				2	第32図
69	剝	片	R — 8	237.973	VII	流紋岩	A ₂	2			2.80	1.85	0.55	2.83		上部、左	側部	2	

No.	器	種	Grid	海抜(m)	層位	石材	石質細分	個体別 番 号	接合	最大長(L) (cm)	最大幅(W) (cm)	最大厚(T) (cm)	重量(g)	使用痕の部位	欠 損 部 位	ブロック	図版
70	ナイフ	形石器	R-8	238.007	VII	流紋岩	F ₃	16	027,80	1.54	1.14	0.55	1.10		下部	2	第21、 29図
71	剝	片	R — 8	237.994	VII	流紋岩	F ₂	15	25	2.46	2.23	0.44	1.30			2	第33図
72	剝	片	R — 8	237.984	VII	流紋岩	F ₃	16	74,126	1.52	1.42	0.23	0.53		上部、下部	2	第33図
73	ナイフ	形石器	R-8	238.005	VII	流紋岩	F ₁	14		1.93	0.73	0.55	0.70		下 部	2	第21図
74	剝	片	R-8	237.965	VII	流紋岩	F3	16	72,126	2.73	2.72	0.31	2.25		下部	2	第33図
75	砕	片	R – 8	238.018	VII	流紋岩	F 1	13		0.80	0.98	0.08	0.10			2	
76	剝	片	R-8	237.957	VII	流紋岩	D1	10		1.91	1.90	0.31	1.05			2	
77	剝	片	R-8	237.948	VII	流紋岩	F₃	16		1.84	1.24	0.17	0.48		上部、下部	2	
78	剝	片	R-8	237.968	VII	流紋岩	F ₃	16		1.14	1.27	0.23	0.35			2	
79	二次加	工剝片	R-8	237.938	VII	流紋岩	D_1	10	15,26,43	4.68	3.13	0.94	15.88		上 部	2	第30図
80	ナイフ	形石器	R — 8	237.869	VII	流紋岩	F ₃	16	027,70	2.25	2.50	0.52	3.55		下 部	2	第21、 29図
81	剝	片	R — 8	237.878	VII	流紋岩	F ₂	15		2.21	2.25	0.30	1.50			2	
82	剝	片	R – 8	237.899	VIII	流紋岩	F ₁	14		1.03	1.83	0.23	0.47		下 部	2	
83	剝	片	R — 8	237.817	VIII	流紋岩	Сз	6		2.16	2.62	0.39	2.20			2	
84	剝	片	R-8	238.249	VII	流紋岩	D_1	10	103,110	1.89	1.45	0.40	1.10		下 部	2	第32図
85	剝	片	R-8	237.793	VIII	流紋岩	D_1	10		1.53	0.96	0.45	0.67			2	
86	頭部調	整剝片	R – 8	237.864	VIII	流紋岩	D_1	10	2,14,21, 35,130,140	1.97	1.44	0.21	0.70			2	第31図
87	体部調	整剝片	R-8	237.875	VIII	流紋岩	D_1	10		1.64	1.39	0.66	0.90			2	
88	砕	片	R — 8	237.829	VIII	流紋岩	F ₁	14		0.65	0.53	0.10	0.05			2	
89	砕	片	R-8	237.800	VIII	流紋岩	Сз	6		0.64	0.62	0.07	0.05			2	
90	使用犯	良剝片	R-8	238.398	IV	流紋岩	D_1	10		2.10	2.25	0.47	2.15	背面左側縁上部	上 部	2	第23図
91	剝	片	S-8	238.466	III	流紋岩	F ₃	16		2.33	1.77	0.37	1.31		下部	2	第26図
92	剝	片	S-8	238.232	V	流紋岩	F ₂	15	19	3.47	2.79	0.42	4.26			2	第33図
93	剝	片	S-8	238.179	V	流紋岩	F ₃	16		2.09	1.10	0.24	0.75			2	
94	剝	片	S-8	238.386	III	流紋岩	F ₃	16		1.45	1.47	0.74	1.22			2	
95	剝	片	S-8	238.115	V	流紋岩	D ₁	10		1.04	1.57	0.20	0.27			2	
96	砕	片	S-8	238.117	V	流紋岩	Вı	3		0.87	0.83	0.45	0.15		der der de muder	2	
97	剝	片	S-8	237.960	VII	流紋岩	D ₁	10		0.96	1.88	0.30	0.56		下部、左側部、 右側部	2	
98	砕	片	S-8	238.058	V	流紋岩	B ₁	3		1.01	1.22	0.10	0.10			2	
99	剝	片	S-8	238.037	V	流紋岩	A ₁	1		1.60	3.36	0.31	1.93		上部	2	
100	剝	片	S-8	238.137	V	流紋岩	F ₃	16		1.00	1.68	0.23	0.42		下部	2	

	No.	器種	Grid	海抜(m)	層位	石材	石質細分	個体別 番 号	接合	最大長(L) (cm)	最大幅(W) (cm)	最大厚(T) (cm)	重量(g)	使用痕の部位	欠 損 部 位	ブロック	図版
	101	剝 片	S-8	237.972	VII	流紋岩	\mathbf{F}_2	15		1.84	2.41	0.49	1.70			2	第26区
	102	剝 片	S-8	237.950	VII	流紋岩	F ₁	14		1.80	1.67	0.40	1.07		下 部	2	
	103	剝 片	S-8	237.845	VII	流紋岩	D_1	10	84、110	1.90	2.40	0.50	2.90		下 部	2	第32図
	104	二次加工剝片	S-8	237.828	VII	流紋岩	F ₁	14	6.9	1.70	2.34	0.40	2.05		下 部	2	第35図
	105	剝片	Q — 9	238.237	V	流紋岩	В1	3		3.85	3.45	0.51	6.57		上 部	2	
	106	ナイフ形石器	Q — 9	238.202	V	流紋岩	Сз	6		4.99	1.27	0.38	2.66			2	
	107	剝片	Q - 9	238.039	VII	流紋岩	A ₂	2		3.20	2.79	0.55	2.43		上部、下部、左側部	2	
	108	打面調整剝片	R — 9	238.310	V	流紋岩	G₄	20		7.54	2.12	0.78	8.71	腹面左側縁中部		2	第24図
	109	剝片	R — 9	238.396	IV	流紋岩	Fз	16		1.91	2.68	0.72	2.58			2	
	110	剝片	R — 9	238.232	IV	流紋岩	D_1	10	84、103	3.18	1.90	0.28	2.20		上部、下部	2	第32区
	111	剝片	R — 9	238.231	IV	流紋岩	Сз	6		3.17	2.78	0.33	3.53			2	第27区
	112	剝片	R — 9	238.163	V	流紋岩	D_1	10		2.87	2.43	0.32	2.75		上部、下部	2	第27区
	113	剝片	R — 9	238.279	IV	流紋岩	F ₂	15	136	3.22	3.18	0.31	3.87			2	第32図
ı	114	剝片	R — 9	238 142	V	流紋岩	A 1	1	018、038、 117、123	2.54	2.51	0.39	2.06		上部、右側部	2	
- 62	115	剝片	R — 9	238.025	V	流紋岩	Fз	16		1.68	2.08	0.32	1.17		下 部	2	
2 _	116	使用痕剝片	R — 9	238.114	V	流紋岩	G 6	22		4.80	2.32	0.75	6.00	背面左側縁下部		2	第23図
'	117	使用痕剝片	R — 9	237.948	V	流紋岩	Сз	6	018、038、 114、123	3.85	3.37	0.78	11.10	背面右側縁 中部~下部		2	第34区
	118	剝片	R — 9	238.040	V	流紋岩	F ₁	14		1.43	0.86	0.24	0.40		上部、下部	2	
	119	使用痕剝片	R — 9	238.058	V	流紋岩	G 5	21		4.05	2.93	0.43	3.98	背面右側縁 上部~中部	上 部	2	第23区
	120	剝片	R — 9	237.992	V	流紋岩	C 1	4		2.16	1.58	0.84	2.25		上 部	2	第26区
	121	体部調整剝片	R-9	237.972	VII	流紋岩	D_1	10		3.45	1.81	1.18	5.28			2	
	122	剝片	R — 9	237.946	VII	流紋岩	D_1	10		1.49	1.68	0.31	0.56		下 部	2	
	123	剝片	R — 9	237.983	VII	流紋岩	Сз	6	018,038, 114,117,123	4.31	2.27	0.56	4.05			2	第34図
	124	剝片	R — 9	237.950	VII	流紋岩	F 1	14		1.69	1.58	0.27	0.90		上部、下部	_ 2	
	125	ナイフ形石器	R — 9	237.856	VII	流紋岩	A 1	1	31	2.05	1.48	0.35	1.10		下 部	2	第21図
	126	剝 片	R — 9	237.839	VII	流紋岩	F ₃	16	72、74	4.33	2.78	0.52	5.82			2	第33図
	127	ナイフ形石器	R — 9	237.769	VIII	流紋岩	F 1	14		3.40	2.10	0.57	3.82		上部、下部	2	第21区
	128	二次加工剝片	R-9	237.838	VII	流紋岩	C 1	4		5.35	5.78	1.93	58.15			2	第23区
	129	打面調整剝片	R-9	237.857	VII	流紋岩	B ₁	3		7.20	8.46	1.50	74.05			2	第24図
	130	剝片	R-9	238.054	VII	流紋岩	D ₁	10	2,14,21, 35,86,140	4.12	3.85	0.66	10.48		下 部	2	第31図
	131	剝 片	R — 9	237.889	VII	流紋岩	F ₃	16		0.87	1.94	0.20	0.22		下 部	2	

No.	器	種	Grid	海抜(m)	層位	石 材	石質細分	個体別 番 号	接合	最大長(L) (cm)	最大幅(W) (cm)	最大厚(T) (cm)	重量(g)	使用痕の部位	欠 損 部 位	プロック	図版
132	プランテ. チップ	ィング	R — 9	237.968	VII	流紋岩	C 1	4		1.07	0.83	0.11	0.12			2	第22図
133	ナイフ用		S — 9	238.309	IV	流紋岩	A 1	1		1.64	2.03	0.32	1.15		上部、下部	2	
134	剝	片	S-9	238.344	IV	流紋岩	E 1	13		1.40	1.00	0.31	0.35			2	
135	欠	番															
136	剝	片	S — 9	238.142	V	流紋岩	F ₂	15	113	3.73	2.72	0.35	3.30			2	第32図
137	使用痕	剝片	S — 9	238.096	V	流紋岩	Αì	1	10	4.17	3.96	1.04	9.83	背面右側縁下部 背面左側縁下部		2	第30図
138	剝	片	S — 9	237.880	VII	流紋岩	F ₃	16		1.67	1.04	0.22	0.38		下 部	2	
139	剝	片	S - 9	237.870	V	流紋岩	Fз	16		1.58	1.97	0.40	1.27			2	
140	剝	片	S-9	237.760	VII	流紋岩	D_1	10	2,14,21, 35,86,130	6.82	4.10	1.08	27.5			2	第18図
141	ナイフ刑	8石器	S-9	237.665	VII	黒曜石	H 1	24		2.02	0.96	0.64	1.60			2	第21図
142	剝	片	S — 9	238.289	V	流紋岩	C ₁	4		1.78	2.14	0.53	1.98			2	
143	剝	片	S-10	238.315	IV	流紋岩	E 1	13		2.60	4.04	0.60	4.90			2	
144	欠	番															
145	. 剝	片	S-10	237.972	V	黒曜石	H ₁	24		1.70	1.52	0.42	1.08		左側部	2	
146	頭部調整	整剝片	Q-11	238.217	IV	流紋岩	C 2	5	191,211	1.36	1.92	0.28	0.52		左側部	1	
147	体部調整	整剝片	Q-11	238.142	IV	流紋岩	C ₂	5		5.42	4.76	0.67	11.85		下 部	1	第16図
148	体部調整	整剝片	Q-11	237.922	V	流紋岩	C 1	4		4.13	3.88	0.47	10.40			1	
149	剝	片	Q-11	237.917	V	流紋岩	C ₂	5		1.24	1.62	0.23	0.31		左側部、下部	1	
150	剝	片	Q-11	237.869	V	流紋岩	C ₂	5		1.10	1.40	0.41	0.75			1	
151	剝	片	Q-11	237.849	V	流紋岩	G ₂	18		1.02	1.50	0.23	0.22			1	1
152	体部調整	整剝片	Q-11	237.847	V	流紋岩	C ₂	5	200	3.70	1.90	0.31	2.20			. 1	第18図
153	体部調整	整剝片	Q-11	237.835	VII	流紋岩	G1	17	158	2.97	1.90	0.96	2.65		右側部	1	第15図
154	剝	片	Q-11	237.784	V	流紋岩	Сз	6		1.14	1.36	0.39	0.33			2	
155	砕	片	Q-11	237.759	V	流紋岩	C 2	5		1.02	0.96	0.12	0.15			2	第22図
156	頭部調整	整剝片	Q-11	237.681	VII	流紋岩	C 2	5		1.52	2.01	0.50	1.10			1	第16図
157	剝	片	Q-11	237.644	VII	流紋岩	C 2	5		1.67	1.56	0.48	1.30			1	第17図
158	使用痕	剝片	Q-11	237.673	VII	流紋岩	G ₁	17	153	3.56	3.54	0.60	7.25	腹面左側縁中部	左側部	1	第15図
159	ナイフ用	形石器	Q-11	237.629	VII	流紋岩	C 5	8		4.66	3.21	1.33	15.05			1	第14図
160	欠	番															
161	砕	片	Q-11	237.610	VIII	流紋岩	不 明	不 明		0.52	0.49	0.11	0.02			1	
162	剝	片	Q-11	237.604	VII	流紋岩	G ₂	18		1.04	1.37	0.28	0.35			1	第16図

No.	器	種	Grid	海抜(m)	層位	石 材	石質細分	個体別 番 号	接	合	最大長(L)	最大幅(w)	最大厚(T)	重量(g)	使用痕の部位	欠 損 部 位	ブロ	図版
163	剝	- 生	Q-11	237.572	VIII	流紋岩	11 月 机刀	番 号	1女		(cm) 2.55	(cm) 2.01	(cm) 0.70	1.60	医用限の即位	人 損 叩 泣	ック	図版
164	剝	片	Q-11	237.569	VIII	流紋岩	C ₂	5			1.90	1.95	0.70	0.88		下部	1	第17図
165	剝	片	Q-11	237.547	VII	流紋岩	G ₂	18			2.80	2.07	0.31	1.12		<u> </u>	1	弗1/凶
166	体部調整		Q-11	237.593	VII	流紋岩	C ₆	9			7.21	3.69	0.21	37.02			1	第16図
167	体部調整		Q-11	237.546	VII	流紋岩	A ₁	1			5.39	3.09	0.98	12.40			1	券10 凶
168	剝	片	Q-11	237.577	VII	流紋岩	C ₂	5			1.18	0.73	0.78	0.36			1	
169	使用痕		Q-11	237.595	VII	流紋岩	C ₁	4			2.47	2.72	0.33	4.30	背面下端部		1	第15図
170	剝	片	Q-11	237.607	VII	流紋岩	C ₂	5			2.51	0.94	0.72	0.50	月四1細巾		1	第13区
171	剝	片	Q-11	237.579	VII	流紋岩	C 2	5			1.66	1.76	0.39	0.90			1	
172	スクレ	-	Q-11	237.599	VII	流紋岩	C ₂	5			2.07	1.19	0.73	1.50			1	第14図
173	剝	片	Q-11	237.592	VII	流紋岩	C ₃	6			1.92	2.60	0.33	1.38			1	2014D
174	剝	片	Q-11	237.479	VIII	流紋岩	C ₁	4			2.61	2.97	0.64	3.55	-,		1	第17図
175	ナイフチ		Q-11	237.569	VII	流紋岩	C ₂	5			1.45	1.69	0.49	1.50		上部	1	第14図
176	剝	片	Q-11	237.548	VII	流紋岩	G ₂	18			2.22	0.83	0.34	0.58			1	713112
177	剝	片	R-11	237.979	V	流紋岩	C ₃	6			1.70	1.44	0.39	0.80			2	
178	剝	片	R-11	237.929	V	流紋岩	C ₃	6			1.91	1.67	0.44	1.05			2	
179	砕	片	R-11	237.876	V	流紋岩	C ₃	6			1.12	0.75	0.25	0.15			2	
180	剝	片	R-11	237.894	V	流紋岩	不明	不明			0.54	1.76	0.21	0.20			2	
181	ナイフチ		R-11	237.510	VII	流紋岩	C ₂	5			5.60	1.82.	0.82	9.50			1	第14図
182	剝	片	R-11	238.230	V	流紋岩	D ₁	10		***	1.53	2.47	0.45	1.73		下部	1	
183	打面調整	整剝片	R-11	237.733	V	流紋岩	C ₂	5			1.29	2.09	0.52	1.30	1 .	下 部	1	第16図
184	剝	片	Q-12	238.070	IV	流紋岩	Сз	6			1.67	2.47	0.30	1.70			1	
185	剝	片	Q-12	237.944	V	流紋岩	C 2	5	193		2.50	2.80	0.22	1.30		左側部	1	第18図
186	砕	片	Q-12	237.914	V	流紋岩	Сз	6			0.55	0.65	0.07	0.02			1	
187	剝	片	Q-12	237.917	V	流紋岩	C 1	4			1.94	1.53	0.34	1.05			1	
188	剝	片	Q-12	238.034	V	流紋岩	C 2	5	190		1.26	0.70	0.27	0.30		上 部	1	第15図
189	剝	片	Q-12	237.827	V	流紋岩	C 2	5			1.76	1.71	0.60	1.27		下部	1	
190	使用痕	剝片	Q-12	237.693	V	流紋岩	C 2	5	188		2.82	1.20	0.47	1.71	背面下端部	下 部	1	第15図
191	使用痕	剝片	Q-12	237.744	V	流紋岩	C 2	5	146、2	11	3.71	4.93	0.64	8.33	背面下端部		1	第18図
192	使用痕	剝片	Q-12	237.672	V	流紋岩	G ₇	23			7.14	4.35	1.42	42.72	背面左側縁下部	下部	1	第15図
193	剝	片	Q-12	237.764	V	流紋岩	C 2	5	185		2.13	1.98	0.37	1.30		左側部	1	第18図

No.	器	種	Grid	海抜(m)	層位	石 材	石質細分	個体別 番 号	接	合	最大長(L)	最大幅(W)	最大厚(T) (cm)	重量(g)	使用痕の部位	欠 損 部 位	ブロック	図版
194	砕	片	Q-12	237.839	V	流紋岩	Сз	6			0.39	0.98	0.11	0.03	***************************************		1	
195	欠	番																
196	砕	片	Q-12	237.660	VII	流紋岩	Сз	6			0.77	0.69	0.06	0.02			1	
197	打面調:	整剝片	Q-12	237.665	VII	流紋岩	C 2	5	203		4.12	7.54	0.98	38.35			1	第19図
198	二次加	工剝片	Q-12	237.693	VII	流紋岩	C 2	5			2.85	1.84	0.35	1.70	背面左側縁下部		1	第15図
199	二次加	工剝片	Q-12	237.652	VII	流紋岩	C ₄	7			4.66	4.66	0.84	18.55	背面左側縁 上部~中部	下 部	1	第15図
200	剝	片	Q-12	237.669	VII	流紋岩	C 2	5	152		1.73	3.09	0.65	3.90		上部、左側下部	1	第18図
201	剝	片	Q-12	237.643	VII	流紋岩	C 2	5			1.80	0.91	0.19	0.25			1	
202	使用痕	夏剝片	Q-12	237.466	VII	流紋岩	C 1	4			3.24	3.70	0.49	5.10	背面下端部		1	第15図
203	打面調	整剝片	Q - 12	237.542	VIII	流紋岩	C 2	5	197		3.98	4.40	0.89	11.35			1	第19図
204	使用痕	夏剝片:	Q-12	237.625	VII	流紋岩	C 2	5	208		3.20	1.23	0.35	1.45		上 部	1	第15図
205	使用痕	夏剝 片	Q - 12	237.585	VII	流紋岩	C ₁	4			4.23	2.65	0.42	6.00			1	第15図
206	剝	片	Q-12	237.534	VII	流紋岩	C 2	5			1.35	1.31	0.55	0.98			1	
207	剝	片	Q-12	237.488	VII	流紋岩	C 2	5			6.93	4.46	1.23	32.62			1	第17図
208	使用痕	夏剝片	Q-12	237.573	VII	流紋岩	C 2	5	204		2.92	1.27	0.32	1.38	背面左側縁 中部•下部	下 部	1	第15図
209	使用痕	夏剝 片	Q - 12	237.601	VII	流紋岩	C 2	. 5	28,210)	6.53	5.98	1.31	29.97	腹面右側縁 中部・下部	上部	1	第20図
210	二次加	工剝片	Q-12	237.634	VII	流紋岩	C 2	5	28,209	9	7.13	5.78	0.71	29.40			1	第20図
211	剝	片	Q-12	237.615	VII	流紋岩	C 2	5	146、19	91	3.86	4.37	0.30	4.80			1	第18図
212	剝	片	Q - 12	237.468	VIII	流紋岩	C 2	5			2.97	1.39	0.70	1.88			1	
213	剝	片	Q-12	237.339	VIII	流紋岩	G ₂	18		17.4	3.38	1.95	0.65	3.52			1	第17図
表4	体部調	整剝片	表 採			流紋岩					7.00	4.43	0.73	23.35				第37図
表5	扁平打	製石斧	表採			緑泥片岩					7.81	3.25	0.73	26.60				
表6	扁平打	製石斧	表 採			結晶片岩					9.30	8.04	1.36	174.00				

おわりに

別府大学付属博物館では,調査研究活動の1つとして「大野川流域における先史時代の調査研究」を,継続的に行っている。特に、「大野川中流域の旧石器 (先土器) 時代の調査研究に力を注いでいる。昭和58年から3回にわたって実施した,大野郡大野町所在の駒方古屋遺跡の発掘調査もその一環である。

駒方古屋遺跡の3回の調査によって、2つの地点で、ATの降下堆積直前の時期が考えられ石器群を発見できた。2つの地点とも、縦長剝片を主体した剝離技術と、ナイフ形石器で代表される石器群と見なされる。

第2地点の石器群については、できるだけ接合を行い、さらに接合できない資料については、 石材・石質を可能な限り細分し、個体別資料化を試た。

駒方古屋遺跡第2地点の限られた石器群から、より多くの情報が抽出できるような資料操作のデータ化をめざした。また、今後関連遺跡の石器群との比較検討ができるような報告書作りを心がけた。

九州においてこれまで知られている旧石器時代遺跡の数は500箇所を超えているが、その大半はATより上位の地層に含まれている石器群である。それだけに、駒方古屋遺跡の石器群はAT下位の資料として注目されよう。

駒方古屋遺跡の3回の発掘調査とその報告書は、別府大学文学部史学科考古学専攻生の熱心な協力があって、始めて成し遂げることができた。調査および報告書作りに参加した学生諸君の氏名を銘記して、感謝の意をささげたい。

駒方古屋遺跡の土地所有者である伊藤昭隆氏をはじめ、駒方公民館の使用に便宜をはかっていただいた大野町中原地区の方々にお礼を申しあげたい。

第2次調査参加学生

国井和哉 · 田中正弘 · 木村暢孝 · 木村元浩 · 原 裕司 · 長友郁子 · 岡崎幸子 第 3 次調査参加学生

田中正弘 ・ 前田達雄 ・ 木村元浩 ・ 長友郁子 ・ 吉村靖徳 ・ 白石美紀 ・ 時元省二 和気いづみ ・ 井出一志 ・ 高松永治 ・ 藤本啓二 ・ 山田 聡

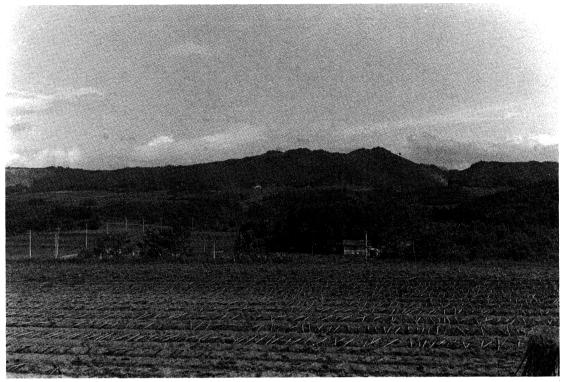
整理•報告書作成参加学生

木村元浩 ・ 長友郁子 ・ 白石美紀 ・ 高松永治 ・ 下田章吾 ・ 多田 仁報告書の執筆は上記の学生の協力によるものであるが、文責はすべて橘にある。

昭和61年12月

別府大学文学部教授

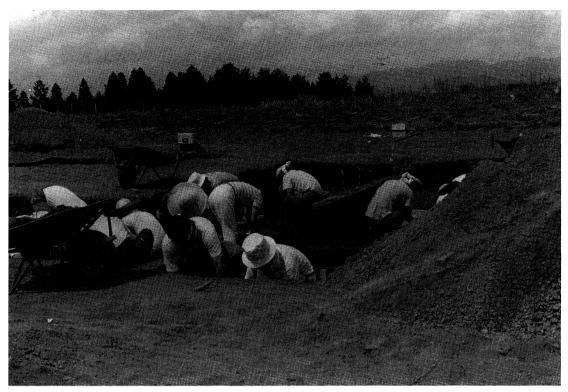
橘 昌信



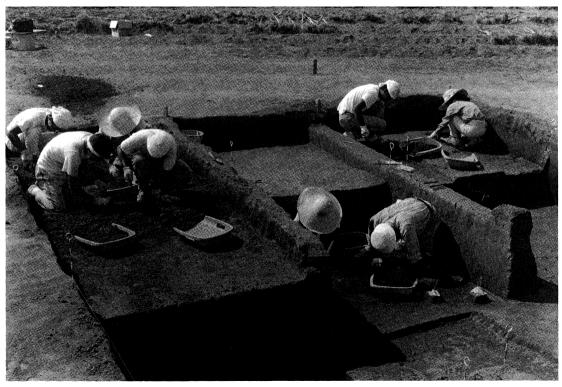
駒方古屋遺跡と大野原台地遠景



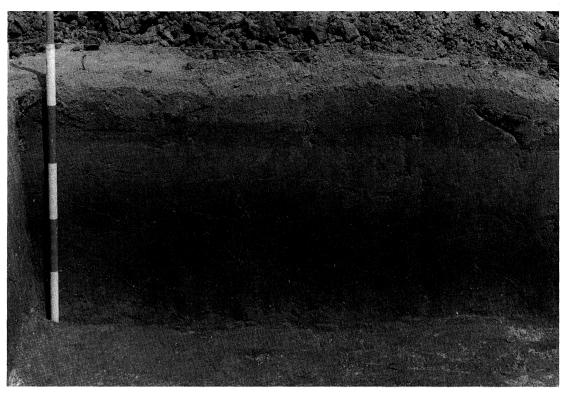
駒方古屋遺跡近景



駒方古屋遺跡第2地点の調査風景



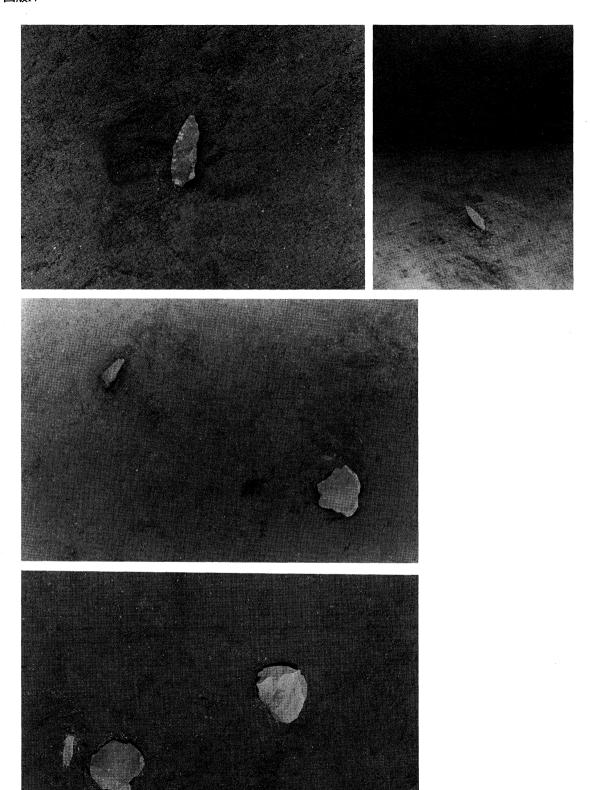
駒方古屋遺跡第2地点の調査風景



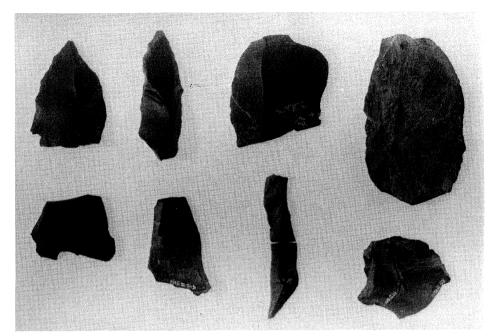
駒方古屋遺跡の土層断面



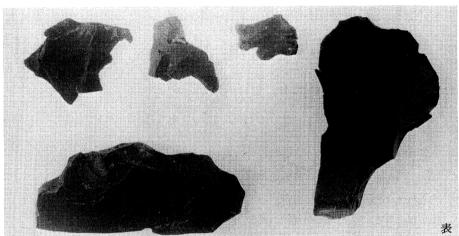
駒方古屋遺跡の土層断面

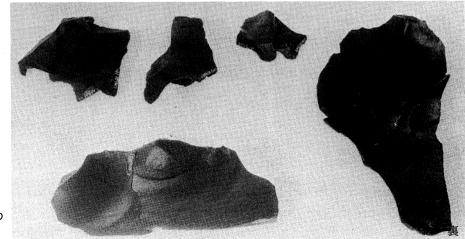


駒方古屋遺跡の 石器類出土状況



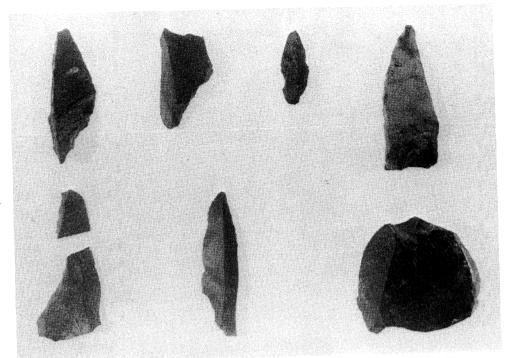
ナイフ形石器 二次加工剝片 使用痕剝片



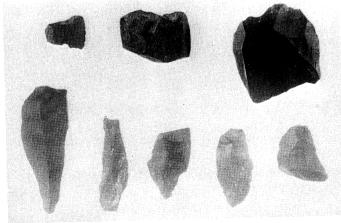


接合資料

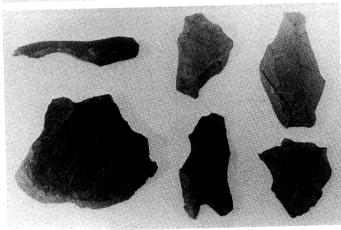
第1ブロックの 石器群



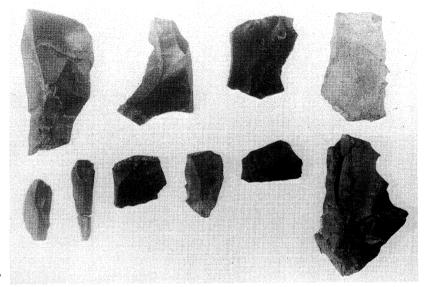
ナイフ形石器 スクレイパー



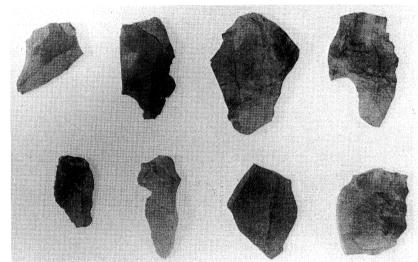
二次加工剝片 使用痕剝片



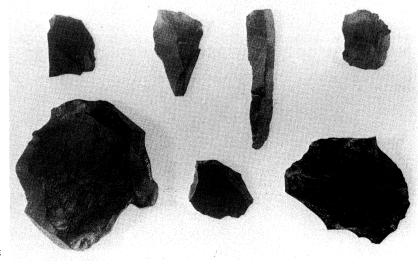
打面調整剝片・他 第2ブロックの石器群



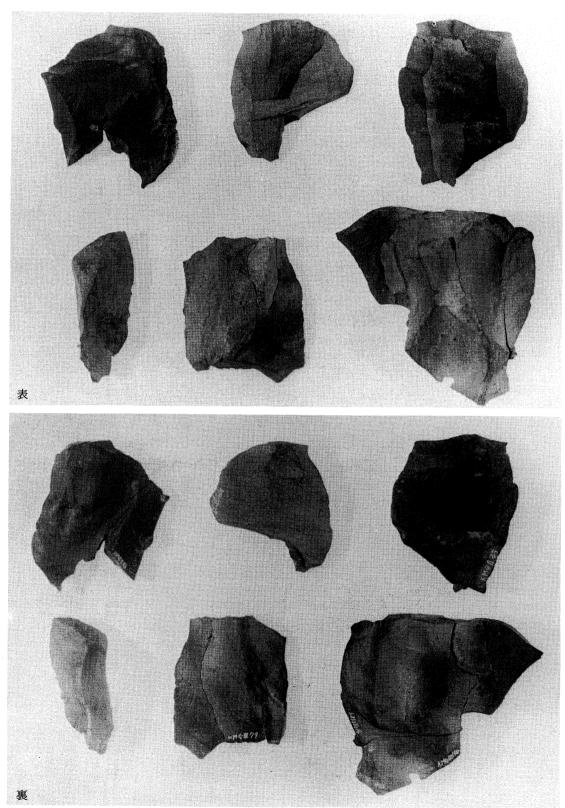
調整剝片•他



剝片

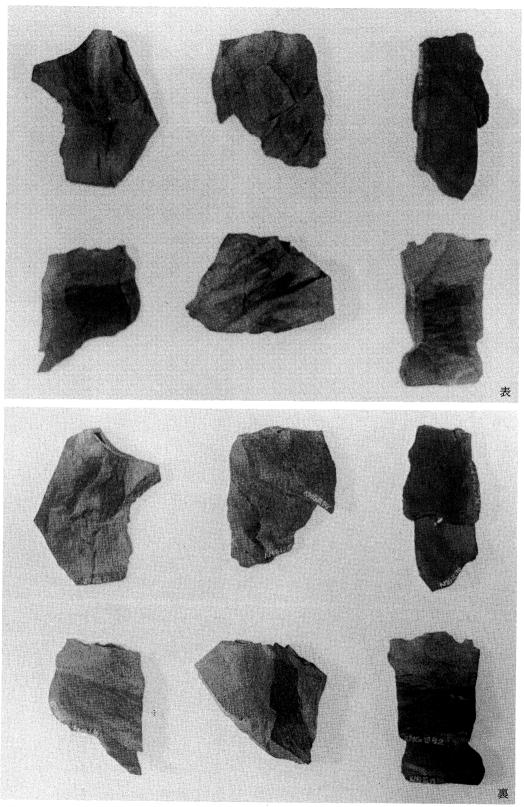


剝片 第2ブロックの石器群



接合資料

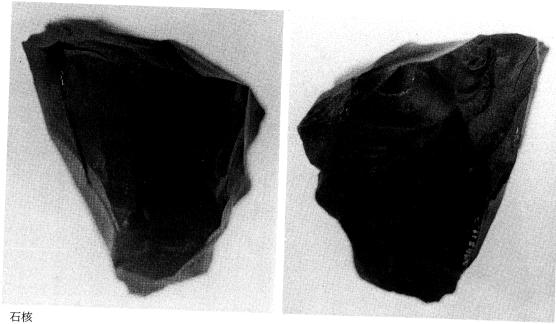
第2ブロックの石器群

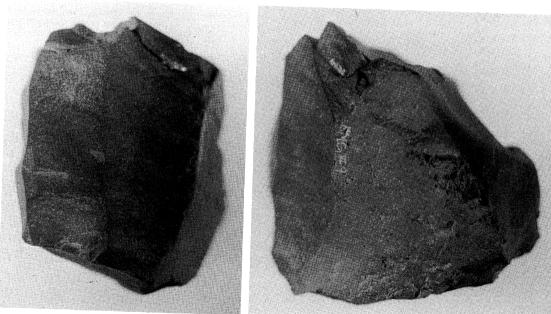


接合資料

第2ブロックの石器群

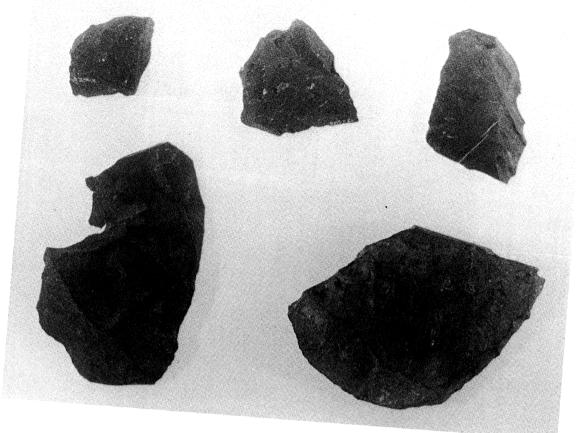
図版X





石核

第2ブロックの石器群



(上) 第3ブロックの石器群 (下) 表面採集の石器



